らあの他所の旅客だよ……如何いふ人で、何んな風采の人だか、聢かり聞いて來るんだよ。鍵の穴からでも覗いて見て、何も彼も知らせてお呉れ――つまり何んな眼をして居るか、蒼いか黑いかと云ふこともだよ……だが、見たら直に歸つて來るんだよ、解つたかい。さア早く、〳〵、〳〵、早く、〳〵！（窓から乘出すやうにしながら叫び續ける、其間に幕下りる。）

第二幕

旅館の小さい室。寢臺、卓子、旅行鞄、空の罎、長靴、衣物の刷毛等。

第一場

オーシップ。

オーシップ（主人の寢臺の上に轉がりながら。）遣り切れねえな、何うも腹が減つて耐らねえ！　眞個死にさうだ！　一聯隊の兵卒が腹の中で調練でもして居るやうに、やけにがア〳〵鳴りやアがる。こりやア自宅へ歸るより外に、眞當面に飯に有り着くことは出來めえな？　一體俺達は如何成るんだ？　彼得斯堡を出てから最う二箇月にも成るんだよ。俺が主人の奴さん、途中ですつかり財布をはたいて仕舞つて、今ぢや兩

耳を垂れて、すつかり萎げ返つて居るんだ。實際、手も足も出ねえのよ――それだのに、奴さん何處の町へ着いても惡く大束を極め込むんだからな。（主人の眞似をしながら。）『おい、オーシップ！　あの家へ行つて室を取れ！　其處で一番好い室だよ。それから最上等の晝食を用意させい。普通の賄ひぢや俺ァ我慢が出來ないからね――俺ァ何でも最上等でなくつちや不可ないんだよ』と、斯うだ。あゝ、あゝ、今日日ぢやァ最上等の料理番が麪包の屑でも喰はせて呉れたら、本當に有難いんだがねえ！……それから通りがゝりの旅行者と懇意に成つて、骨牌なぞおつ始めて、忽ち裸に剝かれちやふんだから耐らないや……あゝ、俺も斯んな生活はつく〳〵可厭に成つた！……眞個田舍に居た時の方が餘程好かつたからね。勿論、大都會に住んでるやうな譯には行かないさ。だが、少くとも自分の勝手にして、たらふく喰ふことは出來るからね。美しい嬶ァでも有つて、一日中暖爐棚の上に寢轉びながら、旨い肉入饅頭でも嚙つて居るのは眞個惡くねえよ……だが、左樣は云ふものゝ、又彼得斯堡位え面白い所もねえからな。懷中に金子さへ有りやァ、芝居でも、舞踏をする犬でも――何でも此方の望み放題よ……又彼處ぢやァ皆物言ひが好いからな――宛然御殿へも上つたやうな氣がするのよ。一寸其邊へ出懸けても、商賈屋の店の者は誰を捕めえても一樣に、『旦那樣、何御入用で御座います？』なぞと吐しやァがるからな――大川で短艇にでも乘つて見るが可い――誰が傍に腰掛けて居ると思ふ？　お役人樣だぞ！……又交際がしたかつたら――只最上等の料理廳へ這入つて行けば可いのよ。其處にやァ學者が居て、世界に何んな事が起つて居るだの、天の星はあれで一つ〳〵如何いふ意味が有るんだのと、掌の平へでも載つけたやうに詳しく說明して呉れるよ……其間には又年寄の士官の細君なぞがいゝやつゝき出すだらうし、時には又綺麗な給仕女なぞが色眼を使つて呉れるかも知れない……畜生ッ、耐らないな！（微笑しながら頭を振る。）いや、又彼奴等ァの行儀の好さと言つたら！　誰にもお前さんと云ふやうな粗葬な言葉を懸けたことがない、何時でも貴方、貴方だ……で、若し歩くのに勞れたら、馬車に乘つ

たら可い。そして、貴公子のやうに澄してりやア可いのよ。若し又賃錢を拂ふ氣がなかつたら――それも譯がないのさ。何處の家にも裏門と云ふものが有る。其處から飛び込んで遁げて仕舞ひさへすれば、惡魔が來たつて捕まるもんぢやアない……だが、それにも裏面は有るのさ。今日華族樣のやうな生活をして居るかと思へば、明日は飢死するかも知れんのだからね――例へば、今のやうにさ。こりやア皆奴さんが惡いのよ。と云つて、如何したもんだらう？　親旦那は十分に金子を下すつた――勿論、そりやア黴が生える迄藏つて置けと云ふ積りぢやアないのさ。へゝ！　だから俺達ア旨く遣つて居たのよ。奴さんは毎日馬車に乘り廻つて、毎日の樣に俺を走らして芝居の切符を取寄せたものさ……だが、一週間經つか經たない間に……如何だい、俺ア奴さんの吩咐で彼奴の新調の上衣を古着屋へ持つて行く始末よ。其次にやア襯衣一枚だけ殘して、何も彼も賣拂つて仕舞ふんだから耐らないや。後にや古ぼけた外套が一枚と寢卷のやうな物ッ限り殘らないだらうよ……あの見事な英吉利製の着物も！　上衣が一枚で百五十留布、胴衣が二十留布して居ると云ふことだがね。洋袴のことは何にも言ふまい、迚も眞當にやして呉れまいからよ。それも奴さんが全然役所へは出ねえで、遊步場ばかり彷徨いて變な女といちやついたり、骨牌ばかり遊んで居たからさ。あゝ、知事樣がそれとお聞きに成つたら！　まア若旦那が政府の役人だなぞと云ふことには頓着なさるまいね――屹度繻絆の裾をまくつて、一週間位えは坐ることも出來ねえ程、尻ッ邊を打ちのめされることだらうよ……お前が笛を吹きや踊つて呉れると云ふのは、此處のことさ。亭主も彼樣言つてやアがるからには、お前が是迄の滯りを拂ふ迄や、迚も喰ふ物を宛てがつちや呉れまい……うむ、で、俺達がいよ〳〵拂はないとすりや……？（溜息を吐く。）あゝ神樣、切めて甘藍汁の一杯でもあつたら！　今頃は世界中の人間が悉皆飯を喰つたらうになる……誰か扉を敲く。屹度奴さんだよ。（急いで寢臺から立ち上る。）

第二場

オーシップ。クレスタコフ

クレスタコフ　彼方へ遣つて呉れ……（帽子と洋杖を渡す。）おい、お前は、又寢臺の上に轉がつて居たな？

オーシップ　私が！　や、戯談ぢやねえ！　何で私が必要もないのに寢て居ますべえ？私やァ旦那の床なんか一度も見たことがねえでがすよ。

クレスタコフ　嘘を吐け！　お前は確にあの上で寢て居たんだ。お前にや見えないのか、すつかり亂雜に成つてるぢやないか！

オーシップ　如何したと言ふんでせうね？　私ァ寢臺てなものは夢にも知りませんぜ。一體、私に足が附いてるなァ何だと思ふんです？　日がな一日私やァ立つて居るんですよ。私が貴方の寢臺を何にしようてんだ？

クレスタコフ（部屋を彼方此方歩き廻る。）一寸見て呉れ、煙草入にや未だ煙草がありかね。

オーシップ　煙草！　一體何處からそれが出て來ると思ふんです？　最う四日も前から空に成つてますよ。

クレスタコフ（唇を嚙みながら、彼方此方と歩き廻る。決然した怖ろしいやうな聲で）おい、オーシップと云つたら？

オーシップ　如何するのです？

クレスタコフ　怖ろしい、併し前より少し曇つた聲で）階下へ行け！

オーシップ　一體何處へ？

クレスタコフ（怖ろしくもなければ、決然ともしない、殆んど哀願するやうな聲で。）階下へ。帳場へなァ……彼處で言つて來て呉れ……何でも可いから喰べる物を持つて來いつてな。

オーシップ　そりやア眞平です！　そいつは出來ませんよ。

クレスタコフ　何だと、此の阿呆漢奴、屹度左樣言つたな……！

オーシップ　定つてますよ……それにだ、假に私が行つたとしても、確にそりやア何の役にも立ちませんよ。あの親爺が言つてるんですもの、最う私達には喰物は遣れないつて。

クレスタコフ　えゝッ、屹度左樣言つたに違いないな！　彼奴は恥知らずの山男だよ。

オーシップ　言ひましたとも。お負けに知事樣の許へ行くつて嚇しましたぜ。それと言ふのも私達が最う四十日も此處に居て、未だ鐚一文も拂つて遣らないからですよ。『お前とお前の主人は』つて、彼奴が言ひましたよ。『本當の無賴漢だ、お前の主人はお負けに泥棒だぞ。お前達のやうな浮浪人や寄生蟲を』つて、彼奴が言ひましたぜ。『俺達は最う隨分見て來たんだつて。』

クレスタコフ　それで貴樣は、惡黨奴、多分又嬉しいんだらう？　俺に其事を繰り返して話すのがよ。

オーシップ　彼奴は言ひましたぜ。『左樣いふ奴が又新に遣つて來て、腚かり腰を据ゑて居やアがるんだ、懸賣で物を取つて、未だ動かうとさへしやがらねえんだ。だが、俺は、』つて、彼奴が言ひましたぜ。『戯談を言つてるんぢや無えんだ。俺はお上へ訴へて出て、お前達を牢舍に打込んで遣るんだ』と。

クレスタコフ　最う可い、馬鹿、最う可いから階下へ行つて、彼奴に晝食の談判をしろッ。何と云ふ無作法な動物だらうなア！

オーシップ　斯うしたら一番好いぢやありませんか。私が主人を、彼奴を階下から此處へ喚んで來ませう。

クレスタコフ　えゝ何を言つてるんだ！　俺はあんな奴に用は無いんだよ。行け、お前が彼奴と談判して來るんだ。

オーシップ　ですが、本當に、旦那……

クレスタコフ　忌々しいな、ちやア行て主人を此處へ喚んで來い！（オーシップ去る。）

第三場

クレスタコフ（一人）

クレスタコフ　恐ろしく空腹じいなア！　俺は些たア食慾が淡れるかも知れないと思つて、一寸散歩に出て見たが、畜生奴、如何して淡れるものか！俺もまアベンザぢや、隨分馬鹿げた事を爲たものだ。あの時は俺も自家へ歸る位の金子は十分に持つて居たんだがなア。あの歩兵大尉の奴がすつかり俺の財布を空にさせちまやアがつた。あの惡黨奴、本當に好く骨牌の胡魔化しを知つてやアがつたよ。十五分間にすつかり俺を裸にして仕舞つたんだからね。何よりも俺は、實際命賭けでも、最一度彼奴と勝負がして見たいよ。左樣いふ機會が有りさへすりやなア！　何と云ふ可厭な町だい！　肉入麪包屋は信用貸しぢや更に賣らないし、失敬な奴だ！（『ロベルト惡魔』と云ふ歌の一節を唱ふ）一體誰も戻つて來ないのか知ら？

第四場

クレスタコフ。オーシップ。給仕。

給仕　主人が如何云ふ御用か伺つて來いと申しました。

クレスタコフ　あゝ、今日は、君、御機嫌は如何だね、好いですか。

給仕　有難う御座います、はい。

クレスタコフ　それに此家の他の人達は如何です？　皆息災ですか。

給仕　へえ、皆息災で、有難う御座います。

クレスタコフ　それに、大分御繁昌のやうですね？

給仕　有難う、如何やら遣つて居ります。

クレスタコフ　まアお聞き、君は眞個可愛いゝよ。處で、誰も未だ私に食物を持つて來

ないんだがね。何卒君一つ階下へ行つて、急いで此處へ持つて來て呉れないか。だつて、ねえ君、私は食事の後で直に爲なけりやア成らぬ、差迫つた用事があるんだからね。

給仕　へえ、ですが、貴方には最う何にも差上げないんだつて、主人が申してますからね。最少しで今日も知事の許へ訴へに行く處でしたよ。

クレスタコフ　訴へに？　一體何をさ？　まア考へて御覽よ、ねえ君、解つてるだらう……私は實際喰べずにや居られないんだよ……實際斷食は出來ないからね！　本當に恐ろしく空腹じいんだよ。私やア眞個眞面目で言つてるんだ。

給仕　眞個御尤もです。たゞ主人が『彼奴等には最う喰物は出さない、以前の拂ひをする迄は』と、斯う申して居ますからね。眞個左樣言つてるんですよ。

クレスタコフ　可いよ、可いよ、洒落な小鳥さん。だが、まア行つて、一寸懸け合つて見て呉れないか。

給仕　だつて、一體何と言つたら可いんです？

クレスタコフ　眞面目に彼奴の良心に訴へて呉れるんだよ、私やア腹が減つて居るんだと、左樣言つて呉れるんだ……勘定のことは……彼奴は多分斯う考へてるんだらうねえ、私が百姓か何かで日がな一日何にも喰はずにぶらつき廻ることも出來るに違ひないと。其處が彼奴は非常に間違つて居るんだよ。

給仕　好う御座います、兎に角申して見ませう。（給仕オーシップと連れ立つて去る。）

第五場

クレスタコフ。（一人）

クレスタコフ　まア全然喰物を寄越さないなぞは、隨分酷からうぜ。俺は今迄覺えのない程物が喰ひたいよ。本當に衣服を賣つて自宅へ歸る金子を造らうかな。先づ洋袴を賣らうか。うむ！　いや、半分餓死しかゝつて居ても、彼得斯堡ッ兒の衣服を着て自

家へ着いた方が可いなア……ヨアヒムが俺に一つも馬車を借さないなぞは、眞個耻知らずだよ。畜生、俺が立派な馬車に乘つて故郷へ歸つて行くとすりや、それも惡くないな。大きな燦々とする灯火の點いた馬車で、オーシップが法被を着て後ろに乘つかつて居るんだ。そして、地主のお邸の露臺の下へ這入つて行くんだぞ。はゝ、悉皆急いで窓の所へ出て來るだらうな！　――『一體、何誰がお着きに成つたのだ？』――何誰でせうね、一體？』俺の從僕が前へ出る。（從僕が名告る眞似をする。）『彼得斯堡のイワン・アレキサンドロヴィッチ・クレスタコフ樣。お這入りに成つても宜しう御座いますか。』――だが、そんな田舍漢に、『お這入りに成つても宜しう御座いますか』つて意味が解るかね。うむ、其奴等の許にやア手當り次第の鵝鳥が、手當り次第の田舍漢が、それ處か、本當に熊のやうな奴でも遣つて行くが可いのよ――そんな奴が案内も請はずに客間へ這入つて行きやアがるのさ……だが、左樣いふ處で、好く綺麗な若い娘に出逢ふもんだ。で、其娘に近づいて行く！『お嬢さん、斯うして手を執らせて頂けませうか……』（手を摩つて腰を屈める。）『糞ッ！』（唾を吐く。）いやに胃の腑で可厭な氣持がするなア。何うも耐らない、本當に腹が減つたよ。

第六場

クレスタコフ、オーシップ、次に給仕。

クレスタコフ　如何だつたい？

オーシップ　何か喰物を持つて參りますよ。

クレスタコフ　（手を拍ち、靜に卓子で調子を取る）持つて來る、喰物を、喰物を、喰物を！

給仕　（僅少な皿と一枚のナフキンを持つて出て。）主人が左樣言へと申しましたよ、これが併し貴方方にお膳を据ゑる最後だつて！

クレスタコフ　主人だと、主人だと、……うむ、お前の主人は洒落なんか仕舞つて置い

た方が可いせ！　一體其處へ何を持つて來たんだね？

給仕　肉汁と燒肉。

クレスタゴフ　えゝ、たつた二皿か！

給仕　えゝ、二皿です。

クレスタコフ　だが、實に破廉耻だなア！　それぢや俺の胃は我慢が出來ないよ。彼奴に言へッ、そんな食事は聞いたこともないつて……何だ、それんばかり！

給仕　ですが、主人は申しましたよ、これでも未だ多過ぎるんだつて。

クレスタコフ　それにソースが附いてないのは如何したと云ふんだ？

給仕　今自家にないからですよ。

クレスタコフ　なに、此家にないつて！　今俺が厨房を通り過ぎた時、ちやんと此眼で見て來たぞ、有り餘る程用意してあるのを……それに客間では今朝づんぐりした二人の奴が鮭だの、未だ他のいろんな物を喰つて居たぢやないか！

給仕　えゝ、ですから有りもするし、又無いこともあるんです——事と次第でね。

クレスタコフ　如何して左樣だ、無いこともあるんだと？

給仕　へえ、——無ければ無いのですよ。

クレスタコフ　鮭も、魚も、カツレツもないと云ふのか、彼處に？

給仕　えゝ、左樣です。ですが、唯あれを頂けさへすりや、拂ふものを。

クレスタコフ　何を言つてやがるんだい、馬鹿奴！

給仕　まア何とでも仰有い。

クレスタコフ　お前は眞個耻知らずの不禮者だな！……他の奴には出す物を、何で俺だけ喰はされないんだ！　あらゆる惡魔に懸けて訊くよ、何故俺だけ喰はされないんだ？　俺だつて彼奴等と同じお客樣じやないか。

給仕　御尤もで——ですが、慥かに一つ違つた所が有りますよ。

クレスタコフ　一體何處に違つた所があるんだ？

給仕　さア、其の違ひ目は手の上へ載つけたやうに解つて居ますよ……他のお客樣は拂ふのです。

クレスタコフ　貴樣は馬鹿だなア、俺は最うお前と議論をしない。(肉汁を喰ひ始める。)一體これは何と云ふ肉汁だらう？　眞個水ばかりだせ。水をお前が此中へ注したんだな……味も何も有りやしない……眞個白湯だ……こんな肉汁が俺に喰へるかい、他のと取換へて來い。

給仕　宜しい。ぢやア、それを又持つて歸りませう。主人が言ひました、貴方がお可厭なら手を附けて貰ふなつて。

クレスタコフ　(皿を碇り抑へる。それを給仕が持つて行かうとする。)まア、まア、此處に置いて行け、馬鹿！　お前はお客樣とも大分遠慮をしない質らしいね！　だが俺は、可愛い友達、そんな洒落は所嫌だよ……まアそんなに俺をいぢめるなよ……(喰ふ)神樣、こりや何と云ふ肉汁だ！(喰ひ續ける。)俺は固く信ずるね、こんな肉汁は未だ世界で誰も喰つたものがあるまいよ……脂肪の目の代りに毛が泳ぎ廻つて居らア(牝鷄をずた〳〵に切る。)あう、あう、あう、何と云ふ媼鷄だい！……燒肉を此方へ寄越せ！……オーシップ、其處に少し肉汁の餘りがある——喰べて仕舞へ。(燒肉をずた〳〵に切る。)何と云ふ燒肉だい？　こりや全然燒肉ぢやアないや！

給仕　何です、それぢや？

クレスタコフ　そんな事は惡魔が知つてるだらうよ。併し燒肉ぢやアないせ。そりやア俺が知つてるよ……まア燒いた漆灰だな、決して牛の肉ぢやアない。(喰ふ。)破落戸の惡黨奴、こんな物を貴樣達アお客樣に出すんだな！　……一口でもこれを喰や、顆の骨を臺無しにしちまはッ。(指で齒をほじる。)左樣いふ惡黨どもだ！　樹の皮より硬いせ——駄目だ、迚も呑み下せない、お負けに齒を惡くすらア。左樣いふ惡黨どもだ！(ナフキンで口を拭く。)で、最う何にも無いんか。』

給仕　最う何にも有りません。

檢察官

クレスタコフ　破落戸の惡黨とは貴樣のことだぞ！　ソースも無し、肉入麪包も無し、それで貴樣達や旅客を待遇するのか。惡人奴！（給仕とオーシップ皿を運び去る。）

第七場

クレスタコフ、次にオーシップ。

クレスタコフ　神懸けて、俺は何にも喰べないやうな氣がしてる。あんな物を喰べたので益々喰ひたくなるばかりだ。幾許か衣嚢に金子を持つてりや、一錢の麪包でも持つて來させるんだがな。

オーシップ（這入つて來ながら。）彼處へ知事樣が來てお坐です。貴方のことを訊いて、一度お話をしたいことがあるんですつて。

クレスタコフ（吃驚する。）えゝ、何だつて！　あの主人の畜生、最う訴へて出やアがつたんだな！　本當に俺を牢舍へ入れる氣か知ら！　忌々しい奴だな！……此處一番貴族的に振舞つて遣らうかな……いや、いや、それは不可ん！　此町にや士官や人民が仕切りなしに街をぶらついて居る……俺ァ彼奴等に首府の風俗とは何んなものだか見せて遣りたいな。商賣屋の娘とそれで色目の交換を始めるんだ……いや、左樣は行くまいよ……併し如何して彼奴にそんな思ひ切つた事が出來たんだらう。一體俺は商人か職工のやうなものだと思はれて居るのかな！（勇氣を出して、胸を突き出す。）あゝ、俺は彼奴に言つて遣るよ、『如何して貴方にそんな無鐵砲の事が遣れたのです……』つて。（戸の鍵が動く、クレスタコフは蒼く成つて顫へる。）

第八場

クレスタコフ。知事。ドブチンスキ。知事は一歩前へ出て立ち停まる。二人は一寸怖ろし相に見合ふ。次に二人とも眼を落す。

知事（幾許か勇氣を出して、軍隊式に挨拶をする。）最も從順なる下僕。

クレスタコフ（前へ屈んで。）貴方の下僕。

知事　御免下さい、若し私が貴方のお邪魔……

クレスタコフ　いや、決してそんな事は……

知事　此町の最高官吏として、私は旅客や貴人が些少でも迷惑を感ぜられないやうに注意する義務を持つて居ますので……

クレスタコフ（始めはやゝ吃る。が、終局に成ると高い聲で聢かりと語りながら。）で、で、如何すれば可いんです？　そりや私の罪ぢやありませんよ……屹度拂ひますからね……最う自家から送つて來るでせう、それが……（其時ボブチンスキが首を扉の中へ突込む。）元々彼奴が悪いのです。彼奴が私に出した仔牛の肉と云つたら、そりやア皮のやうに硬いんです……それに肉汁は――惡魔は知つてるでせう、何でも彼奴が持つて來る物を、私やア窓から捨てなければ成りませんでした。彼奴は私を眞個乾干にしました……眞個驚いた茶ですね、魚の臭氣がするんですよ、全然お茶ぢやないんですね。何故私はそれでも我慢しなければないんでせう？　そればかりか、未だ本當に惡い處があるんですよ。

知事（怖ろし相に。）神懸けてお許し下さい、私に罪はないので御座います。町の市場で賣る肉は何時でも好い物ばかりなんです。コールモーゴルの商賈達が持つて來るんですが――眞個正直な者どもで、模範的に道德的な訓練を受けて居るので御座いますよ。何處で彼奴がそんな惡い肉を買つて來たのか、實際私には解り兼ねますね。併し好くないとすりやア……其時は……貴方に御相談を掛けて相濟みませんが、如何でせう、私と一緒に此處を出て、他の家へお移り下さいませんか。

クレスタコフ　いや、そんな事は可厭です！　私や好く知つてますよ。『他の家』と云ふ言葉に何んな意味が含まれて居るか位は――そりやア監獄へ！　と云ふ意味でせう。だが、貴方は何んな權利があつて、如何すれば左樣大膽に振舞へるんです……だつて私は……私は彼得斯堡の官吏ですよ……（高慢に。）私は……私は……私は……

知事（傍白。）おゝ神樣、何と云ふ酷い憤り方だらう！　此人は悉皆知つてるんだ！あの呪ふべき商賈奴等がすつかり密告して仕舞やァがつたんだ！

クレスタコフ（益々勇んで來る。）幾許貴方が此町の首長だつて、私やァそんな所へは參りませんよ。私は直接大臣の許へ伺ひを立てますよ。（拳骨で卓子を毆る。）何者です、貴方は？　何者です？

知事（殆と氣を失つたやうに成つて、全身を顫はす。）お慈悲に、お慈悲に！　私を零落させないで下さいませ！　私には妻もあります、子供もあります……憐れな官吏を不幸な身にしないで下さいませ！

クレスタコフ　いや、そんな事は爲ない！　そんな事言つてるんぢや有りませんよ。貴方に妻と子供が有るつてことが、私に何の關係があるんです？　貴方に妻や子供が有れば、私や監獄へ行かなけりやァ成らないのですか。何て馬鹿な話ですね？（ポプチンスキは首を扉の内へ突込んで、四邊を見廻しながら怖ろし相に引込ます。）いや、御親切は重々有難いが、斷じて此處は動きませんね。

知事（慄へながら。）それは私の無經驗からですよ。神懸けて、私の無經驗と、此の至難な役に當るだけの技倆の不足から來て居るのですよ。貴方がまァ御自身で判斷して下さいませ、俸給だけでは茶と砂糖とを買ふにも足りませんよ。で、私が幾許かの贈物を返さなかつたとして、そりやァ眞個些細な物なんです……一寸お膳に上るやうなものか、でなきやァ衣服の一組位……あの下士官の後家のことは――私が彼女を毆らせたッてえのは、そりやァ惡口ですよ――神と私の名譽に懸けて、そりやァ惡口で御座いますよ。私の仇敵が私を傷つけようと思つてお伽噺を拵へたんですよ。此土地の人間はそりやァ皆好くないんですせ。私を殺さうと企んで居るのも有りますよ。

クレスタコフ　だが、其奴等と私と一體何の關係があるんです？……（考へて見て。）何故貴方が仇敵だの、下士官の後家だのと言はれるのか、私にやァ薩張解りませんな。下士官の女房、そりや少し別問題ぢやありまんか……だが、私を毆らせる、そんな事

はまア多分爲さりやアしまいね、そんな想ひ附は迚も貴方にや泛ばないでせうね……そりやア本當に酷過ぎませうせ！……私や繰返して言ひますが、屹度拂ひますよ。だが、今は御存知の通り眞個困つて居るんです。私がたゞ此處に坐つてるのも、衣嚢の中に鐚一文無いからですよ。

知事（傍白）おゝ、狡猾な洒落の鳥！　何と云ふ面白い話を此人はするんだらう！だが、あんな事を言ひ出して、如何しろと云ふ氣なんだらうな！　何處を如何捕へて可いやら、俺にや薩張解らない。兎に角、一つ當つて見るかな！　如何成つたとて仕方がない、一番當つて碎ける外ないよ。（高い聲で。）貴方が、本當に金か、さもなけりや何か他の物が御入用でしたら、私や隨分お心持次第に成りますよ。旅客の難儀を救ふのは、そりやア私の義務なんですからね。

クレスタコフ　貴方が金を借して下さらうと云ふ思召なら、早く渡して下さい。左樣すりや、私も主人を滿足させることが出來ますよ。二百留布で澤山です――でなくとも、最つと少くつても。

知事（大藏證劵を掴み出して。）此處に、そりやア恰度二百留布ですよ――まア數へる手數は省いて下さい。

クレスタコフ（金を取りながら。）實に有難う。故郷から直に送つて返しますよ……眞個思ひ懸けないことがあるものだ……成程、貴方は立派な方ですね……さアすつかり風向が變つて來たぞ。

知事（傍白。）あゝ有難い、添けない！――あの人が金子を取つて呉れた！　さアこれで妥協が出來ようと云ふもんだ。そりやア定つてるさ。俺は二百留布の代りに、四百留布手の中へ押込んで遣つたよ。

クレスタコフ　おいこら、オーシップ！（オーシップ現る。）給仕を喚んで呉れい！（知事とドブチンスキとに。）なに、皆さん、未だ立つて被坐しやるんですね！　何卒まアお掛け下さい！　ドブチンスキに。）貴方にもお願ひしますよ、何卒掛けて下さい。

知事　餘り御鄭重に過ぎるので――最う眞個十分で御座いますよ。

クレスタコフ　何卒、何卒！　如何しても掛けて下さらなければ不可ませんよ。今やう〳〵私にも貴方の御人格の誠意と博大とが解りました。正直のところ、最初貴方方は私を……何爲にお出でなすつたものとばかり信じて居りましたからね……（ドブチンスキに。）まア何卒御隨意にお掛け下さいな！（知事とドブチンスキ掛ける、ボブチンスキ首を扉の内へ突込んで聽く。）

知事（傍白。）さア最う少し大膽に振舞つた方が可いかな！　此人は飽く迄密使で通さうとして居るんだからね。可矣、ちやァ兩方で喜劇を演じて遣らう。此方でも此人が如何いふ人か全然知らないやうな風をして遣るんだ。（高い聲で。）私はドブチンスキ君と一緒に――これは此土地に住んで居られる地主ですが――職業の上から巡視に出ましてね、旅客が十分に歡待されて居るか何うか、それを檢分したいと思つて、一寸此旅館へ這入つて見たんですよ――それと云ふのが、私は他の知事連と違つて居るからですね。他の者ならそんな事は心配しませんや。と云ふのは、行政官としての義務を全く勘定に入れないとしても、私は最う眞の基督教的隣愛の心から、總ての人が此の土地で好遇されることを望んで居ますからね――で、其の最中に貴方のやうな愉快な知己を得る機會に遭遇したのは、或程度まで私の熱心の報酬だと考へて居りますよ。

クレスタコフ　いや、私にも嬉しい譯があるんです。打ち明けてお話しすると、貴方が來て下さらなきや、私は最つと永く此處に逗留して居なけりや成らない處でしたよ。如何して拂ひをしたら可いか、眞個途方に暮れて居ましたからね。

知事（傍白。）左樣だ、左樣だ、言ひたい事を言つてらァ！　如何して拂つたら可いか、お前には解らなかつたらうよ。（高い聲で。）お訊ね申しては濟みませんが、何方の方へこれから御旅行なさらうと云ふ思召で被坐しやいますか。

クレスタコフ　サラトフ縣へ參ります、彼處には私の土地が有りますからね。

知事（傍白、諷刺するやうな表情をして。）あんな事を言ひながら、此男は紅い顔一つしないよ。おゝ、斯んな人に懸つちや、餘程用心しなけりや不可ないぞ！（高い聲で。）そりやァ御愉快なことですね、旅行……道の特質……一方には驛遞馬車の都合が惡かつたりして、隨分不愉快なこともありますが、又一方には……精神の此上ない鬱散にも成りますからね。貴方は主に娯樂のために御旅行なさるんでせうね？

クレスタコフ　如何いたして、阿爺に喚び着けられるんですよ。私が今迄彼得斯堡で一向出世をしないと云ふので、老人が大層怒りましてね、他の人は職に着きさへすりや、直に聖ウラジミール勳章を釦鈕の孔へ刺すもんだと言ふんですよ。まァそんな事は老人自ら小一時間も役所の中を彷徨いて見てから言ふが可いのでさ。

知事（傍白。）いや、そんな白々しい事を並べたとて、誰にも解らないよ。で、其阿爺さんと云ふのは、そりやァ此人が今此處で拵へたのさ……！（高い聲。）それで貴方は永らく先方に御逗留なさるお考へですかい。

クレスタコフ　確とは解りませんよ……何しろ阿爺は、彼樣いふ頑固で、馬鹿で、古い胡魔鹽頭の、宛然材木のやうなんですからね。私やァ阿爺の頭の上で言つて遣りますよ。何でも所好なやうに爲さい。だが、彼得斯堡でなけりや私は生きて行かれないんだつて。實際又、如何して私やァ生涯百姓どもの中で暮さなくちや成らぬ程の罰を受ける理由があるんでせう？　そんな事を私は望んぢや居ませんよ、私の精神は文明に渴ゑて居るんですからね。

知事（傍白。）何うも胸襟を披瀝するぢやアないか！　それで居て、尻尾を抑へられるやうな處がないんだからね！　そんな逸話で俺が胡魔化されるかい。些とばかり人間が違ふよ。まァ最そつと緩り話して貰はうぢやないか！（高い聲。）閣下は非常に公正な觀察を下されますな！　生きてるか死んでるか解らないやうな者どもの中へ入つて無學と心の闇に取圍まれて居ては、何を爲ることが出來ませう！　例へば、此町をば御覽下さい、晝も夜も全く休息なしに働いて、母國の爲には何一つ惜しまない、

あらゆる物を犧牲に供する、而も其勞苦の酬いられる期は知らないのですよ……（視線を部屋の彼方此方に徘徊させる。）此部屋は少し濕ッぽいやうですな。

クレスタコフ　眞個怪しからぬ部屋ですよ。南京蟲が居ましてね、生れてから見たこともないやうな奴ですよ。其奴が犬のやうに囓み着くんです。

知事　いや、飛んでもないことでー　貴方のやうな貴いお客樣を左樣いふ拷問に曝して置く――廣い世界に居所のないやうな汚ならしい南京蟲なぞに咬はせる！……それに又此部屋は大層暗いぢや御座いませんか。

クレスタコフ　恐ろしく暗いですよ。お負けに此家の主人は燈火を點けないと云ふ習慣が有りましてね。眞個何にもすることが出來ませんよ。何か讀まうと思つたり、又は書かうと云ふやうな氣に成つたとしても――私にやそれが出來ないんですよ。眼の前の手さへ見えないのですからね。

知事　誠に失禮では御座いますが、……あゝいや、いや、手前風情がそんな事をお願ひしては濟みません……

クレスタコフ　何がです？

知事　いや、いや、私には左樣いふ光榮に浴する値打がありませんよ。

クレスタコフ　ですが、貴方は一體何を考へて被坐しやるんです？

知事　私の考へと申しますと……萬一それを御許容下されたら……手前どもの家の一番立派な部屋を御用立したいと思つて居りますので、そりやア最う明るくて、靜かで……あゝ、いや、〳〵、私は好く存じて居ります、左樣いふ光榮に浴するのは、餘り私の身分に過ぎたことで御座いますから……何卒お腹を立てゝ下されますな……只私が無邪氣なもんで、ついそんなお願ひをしたので御座いますから……

クレスタコフ　いや、腹立つどころか、私や貴方に大いに感謝しますよ。そりやア私にしても、斯んな宿屋に居るよりは素人家の方がずつと居心地が好う御座んすからね。

知事　おゝ、私や最う斯んな嬉しいことはない！　それに家内が何の位喜ぶか知れ

ませんよ。貴方は眞個私の氣に適つた方ですぜ。私やお客樣を款待するより大きな幸福を知らない人間ですからね、別けても貴方のやうな御見分の好い方を！　そりやア詔諛だ、詔諛が云はせる言葉だなぞと考へて下さいますな。――あゝ、いや、そんな弱點のないことだけは斷言出來ますよ。私の申すことは皆本心から出て居るんですからね。

クレスタコフ　いや、非常に結構ですよ。私も裏表のあるやうな人間は大所嫌ですからね。貴方の誠意と朴直とが氣に適りました。敢て言ひますがね、私やたゞ他人から尊敬と心服とを拂はれさへすりや、何も望むところはない人間ですよ。えゝ、心服と尊敬とですね。

第九場

前と同じ連中。給仕、オーシップに連れられて出る。ポプチンスキ、

半ば開いた扉の内を覗く。

給仕　何か御用で御座いますか？

クレスタコフ　勘定書を持つて來い。

給仕　そりやずつと前に貴方に上げといた筈です。

クレスタコフ　俺がそんな馬鹿げたものを大切に藏つて置くかい！　幾許俺は借金があるんだよ？

給仕　貴方は初めの日に晝食をお誂へに成りました、二日目は唯鮭を召上つた切りでした、それから後は何でも皆懸賣で……

クレスタコフ　馬鹿だな、貴樣は！　そんな事を一々訊いてるかい。悉皆で幾許に成ると云ふんだ？

知事　まアそんな事にお構ひなさらんでも宜しいよ。待たせて置けば可いのですからね。（給仕に。）彼方へ行け、勘定は直に屆けて遣るよ。

クレスタコフ　實際、仰有る通りですね。（紙幣を懷中に入れる。給仕去る。半ば開いた扉口からボブチンスキの顏が見える。）

第十場

知事。　クレスタコフ、ドブチンスキ。

知事　如何でせうな、今から二つ三つ此町の公共の建物……まア例へば……病院其他二三のものを御巡視に成つては？

クレスタコフ　一體、此土地ぢや見るやうなものは何があるんです。

知事　はい、私どもの行政が行屆いて居るところを見て頂きたいので……眞個模範的な設備が施されて居ますよ……

クレスタコフ　喜んで拜見します。何時でも參りますよ。（ボブチンスキ頭を扉の內に入れる。）

知事　で、お氣に召しましたら、それから一つ大學豫備門を見て頂きませうか――此町の教育事業の完備した工合を見て頂くために。

クレスタコフ　いや、非常に結構です……

知事　其後で又城廓や町の監獄を御視察に預つたら、左樣すれば――此處の罪人が何んなに注意して監視されて居るかゞお解りに成りませう。

クレスタコフ　だが、何故監獄のやうな所へ行くんです？　そんな物よりは、寧ろ治療や教育のために建てられた建設物を見ようぢやアありませんか。

知事　いづれとも宜しいやうに。では、貴方の馬車にお乘りなさいますか、それとも私の四輪馬車に席を取りませうか……何方に致しませう。

クレスタコフ　左樣、いつそ貴方の四輪馬車の方にして頂きませうか。

知事（ドブチンスキに。）ぢやア君は最う乘れませんよ。

ドブチンスキ　何卒、何卒、一向そんな事は構ひませんよ。

知事（低い聲でドブチンスキに。）ねえ君、一つ大急ぎで、而も狂人のやうに急いでだね、直に二枚の書附を配つて下さいな、一枚は病院のジェミリヤニカ君に、一枚は家内に渡すんだよ。（クレスタコフに。）如何でせう、一つ貴方のお許可を蒙つて、御面前で二三行家内に申し遣はしたいと存じますが――左樣すれば、彼女も大切なお客樣を接待する用意を致します。

クレスタコフ　だが、そりやア如何したと云ふのです……それに硯は其處にありますよ……併し紙は……如何したもんかな……あゝ、此勘定書をお使ひ下さつては如何です？

知事　あゝ左樣で、それでは……（傍白、手紙を書きながら。）まア此人が御馳走と二三本の德利を平げてから、事件が如何成つて行くか見ようぢやないか……俺達がヴォルガのマディラ酒を持つて居るのは此處だよ……そりやア確かに見たところは好くない酒だがね、彼奴は象でも食卓の下へ轉がらせる程強いんだからな……あゝ、此人が何を目當にして居るか、何の方面を防いだら可いか、それさへ解つて居りやアな。（書附を書き終つて、ドブチンスキに渡す。ドブチンスキ扉の方へ行く。が、其瞬間扉の鍵が離れて、扉の外に凭れ懸つて聽いて居たボブチンスキは、扉と一緒に舞臺へ倒れる。皆々低く叫ぶ。ボブチンスキは再び立ち上る。）

クレスタコフ　お怪我はありませんか。

ボブチンスキ　いえ、如何致しまして、如何致しまして。未だ好い鹽梅でしたよ……たゞ一寸鼻の上に……ほんの摩傷を……急いでヒュッブネル先生の許へ駈け着けますよ。あの人は有名な膏藥を持つて居ますからね……

知事（ボブチンスキに非難するやうな風を見せてから、クレスタコフに。）いや、大した事ぢやありません。では、何卒、直に出掛けませう……貴方の召使に行李を私の家へ持つて行くやうに吩咐けませう。（オーシップに。）おい君、御主人の荷物を纏めてすつかり私の許へ運んで呉れ、知事の邸だよ、誰でも道は敎へて呉れるよ。では、

何卒貴方から……（クレスタコフを前に行かせて、自分は其の背後に從ふ。が、扉の外へ出る前に怒の聲暴くボブチンスキに言ふ。）君のやうな馬鹿げた眞似をする人は見たことがないね！　又選りに選つてそんな處で轉ぶとは……お負けに腹ン這ひになぞ成つて……何に例へて可いか解らないね！……（ボブチンスキと共に去る。）

第三幕

第一幕と同じ部屋、同じ裝飾。

第一場

アンナ・アンドレエヴナ。マリヤ・アントノヴナ。第一幕の終局と同し姿勢で、窓の側に立つ。

アンナ　さア私達や最う全一時間も待ちました――そりやア悉皆お前の馬鹿げた虚飾からだよ。すつかりお化粧が出來て仕舞つてから、又改めてぐづ〳〵と見直して居るんだもの……まアあの女つてば何をしてるんだらう！　本當に懊れつたいのね！　何處を見ても人ッ兒一人見えやアしないよ。恰度町中が死に絶えて仕舞つたやうだわね！

檢察官

マリヤ　だつて、阿母さま、二分も經つと悉皆解りますよ。オイドキシヤだつて最う戻つて來ますよ。(窓の外を見て、小さな叫聲を上げる。)阿母さま、阿母さまッてば！彼處に誰か街の外れから此方へ參りますよ。

アンナ　何處に？　お前の幻影の中ぢや、始終誰か知ら徘徊いて居るんだよ……をや、眞實だね、彼處へ誰か來るよ……けれど、誰だらうね？……幾許か小柄のやうだよ、フロックなんぞ着て……まア誰だらう？　隨分懊れッたいわね、誰だか些とも解らないんだもの！

マリヤ　あゝ、あれはドブチンスキさんですわ、阿母さま。

アンナ　ドブチンスキさんだつて！　まア私にもお見せよ。此人は何時でも有りもしないことを想ひ附くんだねえ。あれはドブチンスキさんぢやアありませんよ。(半帛を振る。)おい〳〵、貴方、此方へ被入しやい！……あゝ、被入しやいますね！ですが、早くよ！

マリヤ　本當に、阿母さま、あれはドブチンスキさんですわ。

アンナ　あゝ、又そんな剛情を張るのね！　確かに、あれはドブチンスキさんぢやありませんよ。

マリヤ　だつて、阿母さま、だつて！まア一寸御覽なさいな、あれは本當にドブチンスキさんですよ。

アンナ　あゝ、本當にドブチンスキさんだつたわね。今やつと解つたよ。本當にね。だからお前は剛情を張ることなんか要らないッてんだよ。(窓へ向つて叫ぶ。)早く、早くッてばさ！　本當に貴方は緩いのね！……まア、何處から貴方は來たんですよ？さア早く話して下さいな！　窓の外から話して下さいよ……貴方は何處から……え、如何したと云ふんです！　如何して……大層眞面目な顔をして居るのね？　あゝ！で、良人は、良人は？(窓を離れて、怒りながら。)何て馬鹿なんだらう！　部屋へ這入る迄、何一つ聞かれやしないよ。

檢察官

第二場

前場の人々、ドブチンスキ。

アンナ　さア何卒、さア話して頂戴！　貴方は一體良心に恥ぢないんですか。貴方一人ですよ、私が立派な方だと思つてるのは……衆皆直に遁げて仕舞つて――それから貴方も一緒に！　だから私は始中終一人ぼつちで、誰も私に話して聞かせて呉れる人がないんですよ。貴方恥かしいとは思はないんですか。そんな目に私を遭はせて置いて――私を、私やア貴方のワーニチュカさんとリザンカさんの洗禮をして上げたこともあるんですよ!?

ドブチンスキ　あゝ、奥さん、私も貴方に敬意を示さうと思つたので、走つたの走らないのつて、眞個呼吸が切れて仕舞ひ相ですよ……貴方の僕、マリヤ・アントノヴナさん。

マリヤ　今日は、ビョートル・イワノヴィッチさん。

アンナ　さ、それぢや直に話して下さいな！　一體何が起つたの？

ドブチンスキ　アントン・アントノヴィッチさんが貴方に此書附を寄越しましたよ。

アンナ　で、あの方は何なの？　將軍？

ドブチンスキ　いや、將軍ぢやありません……ですが、些とも將軍に劣りやアしませんよ。何と云ふ立派な態度でせう、何と云ふ威嚴で……！

アンナ　あゝ！ぢやア矢張被入しやると云ふ報道が良人にあつた、あのお役人でせうか。

ドブチンスキ　眞個其役人ですよ！　私とドブチンスキとが最初に見附け出したんです。

アンナ　解りました、〳〵、其先を話して下さい！……だから貴方が言つたんですね……

檢察官

ドブチンスキ　神の救ひに依つて、萬事が旨く行きました。最初の間はアントン・アントノヴィッチさんに對する素振が大分暴かつたですよ。ぷり〳〵しながら、宿屋の中が好く整頓して居ないとか、知事の邸へなぞは行かれないとか仰有いましてね。監獄へ行くと云ふのが一番あの方のお氣に適らないやうでしたよ。ですが、あの方も知事さんの誠意を認めて、少時打解けて話をして被坐しやる間に、有難いことには、だんだん考へが變つて來て、萬事旨く行くやうな都合に成りましたよ……二人は目下病院の方を視察して被坐しやります……矢張私と知事さんとが、あの時考へた通りでしたね、如何しても祕密の彈劾が……ねえ奥さん、私も今度ばかりは隨分心配しましたよ。

アンナ　貴方が？　何をそんなに恐がるんですね？　貴方は官吏でないぢやありませんか。

ドブチンスキ　何も恐がらずとも可いんですがね。彼樣いふ位の高い方の話を聞いて居ると、思はず識らず怖氣が着くものですよ。

アンナ　ですが、其人は一體何んな容子をしてます？……貴方の仰有るやうなことは皆如何でも可いのよ。それよりも私が聞きたいのは、一體何んな風の方なの？　若いんですか、年寄ですか。

ドブチンスキ　若い、未だ非常に若いんですよ。まア漸と二十三位ですかな。ですが、眞個年を老つた人のやうな口調ですよ。『貴方がお許し下されば、私や何處其處へ行きませう、何處其處へ……』なぞと言ひましてね。（身振。）斯うです、斯んな鹽梅式にですよ。『私や讀書が所好ですが、困るのは此部屋が少し暗いのでね』なぞと仰有いましてね。

アンナ　それで髮の毛は何んな色でした？　褐色ですか、金髮ですか。

ドブチンスキ　いや、栗のやうな褐色ですよ。それとも——明るい褐色でしたかな……それに眼が活々として火花でも散らすやうですよ……！

アンナ　で、まア此書附には一體何が書いてあるんでせうね？（讀む。）『取急ぎお知らせ致し候。私の境遇は甚だしく危急に瀕し居候。されど神の御惠に依り、鹽漬の胡瓜二個、並に魚卵漬半皿、一留布二十五哥……』（默る。）一體これは如何したと云ふんでせうね？　何にするんでせう、此胡瓜の鹽漬と魚卵漬を？

ドブチンスキ　あゝ、アントン・アントノヴイッチさんは周章てゝ反古紙に書いたんですよ。確に宿屋の勘定書に書かれた筈だ。

アンナ　成程、左樣ですね！（讀み續ける。）『されど神の御惠に依り萬事が幸福なる終局を告げることゝ存じ候。其許には出來るだけ早く部屋を一つ客のために整へ置き下され度候――金毛氈を用ひられたく。饗應の儀は別段御心配を要せず、但し酒は入用にて候。商人のアブヅーリンに命じ、最上のものを取寄せられたく、若し持合せざる節は、彼奴が酒倉を盡く打壞し申すべく候。私の愛人よ、私は其許の手に接吻いたし候、私は依然として其許のアントン・スクワズニックーヴムファノヴスキにて候。』あ、神樣、一刻も猶豫は出來ない！　おい、誰か居ないかえ……ミーシュカ！』

ドブチンスキ（扉に向つて急ぎながら、叫び續く。）ミーシュカ！　ミーシュカ！　ミーシュカー（ミーシュカ入り來る。）

アンナ　ねえお前、大急ぎで商人のアブヅーリンの許へ駈けて行つてね……待つといで、私が書附を上げるから。（机に凭り、書附を書きながら言ふ。）此書附を馭者のシドールに渡して、商人のアブヅーリンの許へ持つて行つて酒を取つて來いつて言ふんだよ。でお前はお前で尊いお客樣がお出に成るんだから、急いで此部屋を綺麗に片附けとくれ。寢臺、化粧道具、左樣云つたやうな物を齊然としてね。

ドブチンスキ　では私や、アンナ・アンドレエヴナさん、急いで行つて、何んな風に視察して被坐しやるか見て來ますよ。

アンナ　えゝ、行つてらつしやい、〳〵、決して引留めはしませんよ。

第三場

アンナ・アンドレエヴナ。マリヤ・アントノヴナ。

アンナ　さア、お前、私達も少し衣裝のことを考へなけりや不可ないよ。何しろ都のお洒落が來るんだからね。神樣、あの人に此家の缺點が解りませんやうに、私どもを御守り下さいませ。で、お前に相談するんだがね、お前はあの小さな緣の附いた青い衣服を着ては如何だえ？。

マリヤ　あら、阿母さま、青衣ですッて！　そんなもの私可厭なこッた。地方判事の奥樣も最う青衣を着てますし、病院監督のお嬢さんも矢張青衣を着て居るのよ。薔薇の方が私にやずつと似合ふわよ。

アンナ　薔薇が！……あゝ、左樣だね——對照から云つても！　私が藁色の衣服を着ればなほ〳〵お前には似合ふだらうよ。あの藁色は本當に私の好きな色氣だからね。

マリヤ　あゝ、阿母さま、藁色の衣服なんか本當に着ないで下さいな！　あんな物阿母さまに似合やしないわよ！

アンナ　藁色が似合はないつて？

マリヤ　左樣よ、似合はないことよ。左樣ね、阿母さまには何が似合ふでせう。藁色は黑い瞳の人にばかり似合ふんですわ。

アンナ　まア、お前は何を言つてるんだね！　私が如何して黑い瞳を持つて居ないんだらう？　いゝえ、お前、私の眼は黑過ぎる位なんだよ！　お前は本當に好い加減な事ばかりぺちや〳〵饒舌るのね！　私が黑い瞳でないと云ふことがあるものかね！　骨牌の辻占を引いて見ると、何時もクラブの女王を引當てるんだもの！

マリヤ　あゝ、阿母さま、ハートの女王の方が貴方にはずつと好く似合ひますよ！

アンナ　いゝえ、何を言ふのだね、本當に何を言つてるんだよ！　ハートの女王だなんて！（急いで其處を去りながら、舞臺の後ろで繰返す。）ハートの女王だつて！　何

を思つてそんな事を言ふんだらう！　あの娘は何處からそんな事を想ひ着いたんだらうね！　ハートの女王だなんて！（二人が舞臺を去ると、直ぐミーシュカが塵埃を拂きながら出て來る。一方の扉口からは頭の上に行李を載せて、オーシップが現れる。）

第四場

ミーシュカ、オーシップ。

オーシップ　何處から行くんだらう？

ミーシュカ　此處からだよ、小父さん、此處からよ！

オーシップ　一寸休ませて貰はう。眞個呼吸が切れさうだ……あゝッ、酷い目に逢へば逢ふもんだな！　空きッ腹にやア何んな荷物だつて重いと云ふが、旨い事を言つたもんさ。

ミーシュカ　小父さん、將軍は直ぐ來るんだらうね？

オーシップ　何だい、將軍てえのは？

ミーシュカ　お前さんの御主人さ。

オーシップ　俺の主人？　彼奴が如何云ふ將軍だと云ふんだい！

ミーシュカ　え、ぢやア將軍ぢやア無えんだね？

オーシップ　將軍――成程な！　だが、自宅の將軍は將軍でも少し種子が違つてるのよ。

ミーシュカ　すると、ほんたうの將軍より偉いのかね、偉くないのかね。

オーシップ　偉いともよ。

ミーシュカ　まア此處を御覽！　だから、斯んな大袈裟な仕度がおッ始まつてるんだよ。

オーシップ　ねえ君、ちびさん、見たところ、君は却々氣の利いた小僧だな。君一つ喰物を少許りで可いから心配して呉れないかね？

ミーシュカ　あゝ、小父さん、お前さんにやア未だ何にも用意してないんだよ。普通の喰物なんかお前さんにや喰はせられないだらうしね。なに、お前さんの御主人が食卓に着きさへすりや、今に誰かお前さんにも持つて來て呉れるだらうよ。

オーシップ　だが、普通の喰物つて、一體何んな物があるんだい？

ミーシュカ　キャベツの肉汁と碾割と肉入麪包位なもんだよ。

オーシップ　キャベツの肉汁と碾割と肉入麪包位なもんだ？　可矣、それを悉皆二人で平げッちまはうぢやないか。だが、先づ此行李から先へ片附けよう。彼處にや未だ他の扉があるかい。

ミーシュカ　あるよ！（二人は行李を次の部屋へ搬んで行く。）

第五場

巡査が背景の兩扉を廣く開ける。そこにクレスタコフ、其後から知事、次に病院監督、學校長、ドブチンスキ及びボブチンスキが現れる。ボブチンスキは鼻の上に膏藥を貼つて居る。知事は巡査達に床の紙片を指し示す。彼等の二人急いでそれを拾はんとして、鉢合せをする。

クレスタコフ　いや、立派な設備でした！　此土地へ來て特に氣に適つたのは、町中の見るに足るものを悉く旅客の前に提供すると云ふ一事ですね。他の町では、何にも私に見せて呉れませんでしたよ。

知事　他の町ぢや、敢て申上げますが、官吏どもは皆自分の私腹を肥すことばかり考へて居ります。然るに此土地に於きましては、一同熱誠を以て治蹟を擧げると云ふことの外に、何一つ考へて居ないので御座いますよ。それは私の敢て斷言し得る所で御座います。

クレスタコフ　先程の御馳走も非常に結構でしたな。眞個滿腹しましたよ。何ですか、此土地ぢや何時もあんな旨味い物ばかり喰べて居るんですかね。

知事　いえ、それは最う尊いお客様の御出席を祝ふ場合に限りますよ。

クレスタコフ　正直のところ、私や旨味い物を喰ふのが所好でしてね。若し人間が觀樂の花を手折つて不可ないとすりや、人生に何の價値がありませう？　あの肴は何と云ふ名ですか。

病院監督　（進み出て。）鹽漬鱈で御座います。

クレスタコフ　眞個旨味い肴ですね！　時に私達が食事をしたのは何處でしたかね。あれは病院でしたか。

病院監督　はい、病院で御座いました。

クレスタコフ　あゝ、左様ですか。成程、彼處には寢臺がずらりと並んで居ましたね。で、病人は最う癒つたのですか。何うも餘り見懸けないやうでしたね。

病院監督　ほんの十人許り未だ殘つて居ます。それッ限りですよ。他の者は皆癒つて退院しました。其處がそれ、あの病院の行屆いた設備のお蔭でしてな。私があの監督を――引請けた瞬間から――恐らく貴方が御信用に成らぬ程の事實で御座いますがね――患者は皆蠅のやうに癒つて仕舞ふんですよ。（註に曰、百姓どもは蠅のやうに死ぬと云ふ露西亞の諺をもぢつたもの。）病人が診察所へ來るか來ない間に、最う癒つて居るんですからね。で、それは單に醫藥の力だけでなく、又此病院の清潔と設備とにも負ふ所があるんですな。

知事　で、私も御免蒙つて、知事の雙肩に懸つて居る重大な任務を簡單に申上げても宜しう御座いませうか……隨分無數の仕事があるものですよ。例へば公の建築、警察事務、道路の調査など――一口に言へば、それがためには有爲な頭腦を有つた者でも身體を壞して仕舞ひさうな任務ですな――ですが、お蔭樣で、此土地では萬事が不思議な程ど都合好く運んで居ります！　他の知事は恐らく自分の私腹ばかり肥すことを考へて居ませう。ですが、私は、何卒御信用下さいませ、私は休息んで居る時でも獨語を言ふんですよ。主よ、我が神よ、本當に政府が私の熱誠と寡慾とを信じて、私に

對して滿足を感ずるやうにして下さいませ、……政府が私に酬いようが酬いなからうが、彼等の意志を實現するのが私の最高の目的で御座います……其目的を果しさへしたら、私は少くとも良心の平和を喜ぶことが出來るのです。で、此町の到る處に秩序が保たれて、街は掃かれ、監獄は戸締を嚴しくされ、泥醉漢の數も多くないとしたら――其上私は何を望むことが御座いませう？　あゝ、私は決して名聲なぞを求めるものでは御座いません！　名聲は實に人を誑かす好餌です！　が、善を行はむとする幸福に較べては、凡てがたゞ塵埃と虚榮に過ぎない！』と。

病院監督（傍白。）無賴漢奴、旨く嘘を吐きやアがるぞ！　あゝ、俺にも神樣があんな舌を與へて下すつたらなア！

クレスタコフ　いや、御尤もです。白狀しますが、私も折々演說を遣ることが所好ですよ……而も或時は散文で、又或時は韻文でね。

ボブチンスキ（ドブチンスキに。）何と旨いことを言つたもんぢやアないか、ドブチンスキさん！　彼樣いふ註釋と云ふものは……何うもあの方は餘程深く人間を研究したものに相違ないね。

クレスタコフ　處で、貴方方の間には、何か愉快な會はありませんかね、例へば骨牌を遣る仲間と云つたやうな？

知事（傍白。）へゝ、お出なすつたな、お前は又如何して私の庭へ石なぞ投げて見るんだい？（註に曰、お前の腹は解つて居るよの意。古諺。）（高い聲。）却々持ちまして！　そんな仲間なぞ此土地では夢にも見られませんよ。私自身に於きましては、骨牌なぞに手を觸れたことも御座いません……眞個骨牌を遊ぶ方法さへ知らない位ですよ。骨牌を見ただけでも平氣ぢや居られませんね……で、若しうつかりしてダイヤの王とか、又は其他の骨牌を見るやうな不幸に遭遇しますと、失禮な話ですが、吐かずには居られない程胸がむか〳〵して參りますよ。嘗て――それが如何してそんな事に成つたのか存じませんがね――子供達が骨牌をする家を建てやうッてなことを想ひ着きまして

ね――其時も私終宵呪はしい骨牌の夢に魘されて居ましたよ……能くまア他人は貴重な時間をそんな遊戯に浪費することが出來たもんですね！。

學校管理官　（傍白。）道化野郎奴！　未だ昨日のことぢやないか、彼奴が俺の財布を百留布輕くしやアがつたのは！。

知事　私に於きましては、寧ろ私の時間を町の幸福を計ることに使つた方が一層性に適つたやうに思ひますよ。

クレスタコフ　成程御尤もです……だが……　何ぢやありませんか……　そりやア物の見方に據りますよ。例へば、空拳で錢儲けをしようなぞと思ふのは……左樣、左樣云ふのは……だが、時には左樣云ふ遊戯を一寸して見るのも、私には大きな慰安に成りますよ。

第六場

前場の人々。　アンナ・アンドレエヴナ。　マリヤ・アントノヴナ。

知事　家族を御紹介しようと思ひますが、お許し下さいませうか――家内と娘とで御座います。

クレスタコフ　（お叩頭をする）奥さん、私は貴方のお目に懸つて心から喜ばしく存じますよ。

アンナ　如何致しまして、手前こそ貴方のやうな御立派な方とお知合に成つて、何の位嬉しいか解りませんわ。

クレスタコフ　（洒落者らしく。）奥さん、そりやアあべこべですよ。一番嬉しいのは私の方です。

アンナ　如何してそんな事が御座いませう！　貴方はたゞ禮儀からそんな事を仰有つてるんですよ。何卒お掛け下さいませ。

クレスタコフ　おゝ、貴方のお側に立つて居るだけでも、私にやア最う非常な幸福な

んです。が、是非下に居ろと云ふことでしたら、掛けも致しませう……つまり貴方のお側に掛けたら、何んなに幸福でせうね！。

アンナ　何卒私のやうな者にそんな勿體ない事を仰有らないで下さいませ……貴方のやうに花の都から斯んな所へ被入しやると、眞のお都育ちですから、暫時の御旅行でも定めて御退窟で被坐しやいませうね。

クレスタコフ　眞個詰りませんよ。Comprenez-vous,（御存じでせうが、）都界の生活に慣れた者が不意に田舎の街道へ遣つて來ると……旅館は穢ならしいし、あらゆる快樂は缺けて居るし、田舍だけに何事も粗莽ではあるし……若し此度のやうな幸福な出來事に出會さなかつたら、そりやア最う……（アンナ・アンドレエヴナを洒落者らしく眺め遣りながら。）……いや、これが凡てを忘れさせて仕舞ひますよ……

アンナ　眞個、何んなに御不自由で被坐しやいませうね……

クレスタコフ　ですが、奥さん私やア今非常に愉快に成りましたよ。

アンナ　まア飛んだ事を！　いろ〳〵仰有つて下さいますが、私やア勿體なくてそんな光榮に浴することは出來ませんよ。

クレスタコフ　如何して左樣です、奥さん？　それ處か、貴方はそれを請求する最も大きな權利をお持ちですよ。

アンナ　いゝえ、最う田舍住ひばかり致して居りますので……

クレスタコフ　ですが、其田舍には魅せられるやうな小山や囁き交す小川なぞがあつて……尤も、そりやア彼得斯堡に優る所はありませんな！　あゝ、彼得斯堡！　何と云ふ華やかな生活でせうね！　貴方は多分私を普通の祕書官位に思つて被坐しやいませうね。甚だしい誤解ですよ。私やこれでも總理大臣と親密な關係を有つて居るんです！　あの人が私の肩を叩いて言ふんですよ、『さア君、一緒に飯を喰はうぢやないか』つてね。私や毎日只の二三分間内閣官房の私の室へ出て、單に此れをしろとか、彼れをしろとか吩咐けさへすれば可いんです！　其處には又書き役專門の官吏が居りまし

てね――上手な書記が……クリークリー筆が紙の上を飛んで行きますよ……加之、私は八等官にされる處でしたよ。其譯も私にや解つて居ました。で、給仕が靴掃を持つて階段の上迄私の後を追懸けて來て、『イワン・ラザレヴィッチ樣、一寸貴方のお靴を磨かせて頂けますまいか！』なぞと云ふんです。だが皆さん、如何してそんなに立つて被坐しやるんです？　まアお掛けなさいな！

知事　左樣いふ高貴なお方の前では……

病院監督　私達の身分には過ぎたことで御座いまして……

學校長　何卒、私達のことはお氣に掛けないで下さいませ！

クレスタコフ　形式はお止め下さい！　何卒まア席に著いて下さい！　私の地位なぞは考へないで下さい！（知事と他の人々凡て席に就く。）それどころか、私は到る處人の注意を惹かない間に遁げて仕舞はうと、あらゆる手段を盡すんです。だが、人々の注意を免れて仕舞ふことは迚も出來ないものですな！　私や到る處で見破られるんですよ。未だ私が其處へ着くか着かない間に、『見よ、見よ、彼處へイワン・アレキサンドロヴィッチさんが行くよ』と喚び懸けるんです。一度なぞは、それ處か元帥だと思はれましてね、兵隊が守衛本部から駈け着けて捧げ銃をするぢやアありませんか。すると、其士官が言ひますには――そりや私の友達だつたんですがね――『一寸見たまへ、君、僕等は今君を元帥だと思つたんだぜ！。

アンナ　まア憫れましたね！

クレスタコフ　で、美人と云ふ評判の女優は皆私の知合でしてね――私自身もさまざまな評判の好い脚本を書きましたよ……有名な作者連とも往來して居ます。プーシキンとは特に親密な間柄でしてね。つい近頃のことですが、彼奴に會つた時言つて遣りましたよ、『おい、君、プーシキン、景氣は如何だい？』つてね――『えゝ、まア如何やら旨く行くやうです』と、彼奴が返辭をして居ました。私や貴方に斷言しますがね、あのプーシキンてえ男は眞個變人ですよ。

アンナ　あら、貴方も詩人なんですね！　詩を作る――本當に好い心持の仕事でせうね！……それで貴方は新聞の方にも御關係があるのですか。

クレスタコフ　えゝ、新聞にも時々書きますよ。序ながら私の作の數は最う隨分多く成りました。脚本の方では、私や『フィガローの結婚』『ロベルト惡魔』それから『イルマ』なぞを書きました。あゝ最う表題すら全部記憶えて居ませんよ。で、それが皆偶然に出來た遣附け仕事なんです。眞個計畫を立てゝ書いたことなぞありませんよ。劇場主が私を休ませて呉れないんですからね。『何卒、まア貴方』ッてえのが、何時でも口癖なんですよ。『最一度だけ何か書いて下さいな！』――左樣云はれると、私も……考へますね――『好うがす、遣つて見ませう、ねえ君。』――そして、皆一晩の中になぐり着けて仕舞ふんですよ。私や詩を作ることが不思議なほど無雜作でしてね。男爵ブラムボイの名の下に公にされて居るもの、例へば『フレガットの希望』と『莫斯科の電信機』なぞは、皆私が書いたのですよ。

アンナ　まアそんな事がありますかねえ！　では、貴方が男爵ブラムボイさんなんですか！。

クレスタコフ　左樣ですとも、男爵ブラムボイですよ。處で、私や出版するためにそれ等の詩を集めなければ成らない。私や其の報酬としてスミルジンから四萬留布取りましたよ。

アンナ　それぢやア大方あの『ユリ・ミロスラヴスキ』も貴方がお作りに成つたんでせうね？。

クレスタコフ　左樣です、あの作も矢張私のものですよ。

アンナ　あゝ、私も左樣だらうと思つて居ました。

マリヤ　でも、阿母さま、表紙にはちやんと『ザアゴスキン著』つて書いてありましたよ。

アンナ　左樣……　お前が此機會を遁さないで盾をお衝きだらうとは、私も知つて居

ましたよ。

クレスタコフ　あゝ、左樣です、そりや本當ですよ――あの小說はザアゴスキンの作ですがね、併しなほ其外に『ユリ・ミロスラヴスキ』があるんです。それが私の作ですよ。

アンナ　左樣、其通りですよ、其通りです――それを私が讀みました。あれは貴方のお作でしたね！　何んなに面白う御座んしたらう！

クレスタコフ　實のところ、私や全く文學で生計を立てゝ居るんでさ。私の家は彼得斯堡でも有名なものゝ一つです。イワン・アレキサンドロヴィッチの邸と云やア誰でも知つてますよ！……（出席者一同に振り向いて。）まア皆さん、何時か彼得斯堡へお出での折は、一度訪問して、私を喜ばせて下さい！　其時にや又舞踏會でも開きますよ。

アンナ　貴方がお開きに成る舞踏會なら、嘸趣味があつて盛大なことでせうね！　今からそれが想はれますわ！。

クレスタコフ　萬事簡單に遣ります、殆んどお話しするだけのこともありませんよ。食卓の上には、例へば水甜瓜のやうなものが出ます――左樣、一つ六百留布の奴ですな、肉汁は皿に入れたまゝ蒸汽船で直接巴里から取寄せますよ。蓋を開けると――おゝ鷲が！――それ以上高價な物ア世界中を探したつて有りませんね。私や毎日舞踏會へ詰め切りです。それにホイスト（骨牌）の倶樂部もありますよ。會員は外務大臣、佛蘭西の使節、獨逸の使節、それに私です。あゝ、其勝負の烈しさつたら！　あれに較べるやうなものは何處へ行つても見られませんね。で、それが終つてから自宅へ歸つて梯子段の四つも這ひ上ると、最うへと〳〵に成つて家主のお女將に『おい、おい、マヴルーシャ、寢衣を……』と云ふだけの力もありませんね。をや、私は一體何を言つてるんでせう！――あゝ忘れましたよ、私やアなに二階に住んで居るんです。梯子段はたつた一つしかないんですよ……で、皆さんに斷言しますがね、私が未だ起きない間に私ン許の客間を覗くと、そりやア面白いんですよ。其處にやア伯爵だの、侯爵だの

がぎし〳〵詰め懸けて居ましてね、其奴等が恰度熊蜂のやうにぶん〳〵唸つてるんですよ。其音の外にやァ何にも聞へませんや……此前私やァ大臣に成つたこともありますと……（知事を始め其他の官吏此言葉を聞いて恭しく立ち上る。）だから手紙の宛名にやァ何時でも、閣下……つて書いてありますよ。一度なんか、お負けに總理大臣の代理迄させられましてね。それにやァ可笑しな話があるんですよ。總理大臣は旅行をしてたんです——何處へ？　そりやァ誰も知りません。勿論、いろんな風聞は立ちましたがね。で、誰が其の代理をしたでせう？　そりやァ隨分將軍どもゝ澤山居りましたよ。其奴等ァ總理大臣より上のものはないと心得て、がつ〳〵してる連中ですからね。まァ其連中が遣つて見るには見ました——だが、畜生！　左樣容易くは問屋で卸しませんや！　まァ當つて見ない間は譯もない事のやうに考へて居たんですね、だが、好く調べて見るてえと……如何だい、將軍連は遁げ出したんですよ。で、私ゝ許へ遣つて來ましたね。急使に次いで急使が來る……想像が出來ますかい、三萬五千の急使ですよ。えゝッ、何と云ふ地位に立つたもんでせうね！『イワン・アレキサンドロヴィッチさま、卽刻御一緒に被入しつて下さい。貴方は總理大臣の印綬を帶ばねば成りませんよ！』ッてな騷ぎでさ。打明けてお話しますがね、私や一寸風邪氣味でしてね、寢衣を着て居たんですよ。それと云ふのが、私やァ斷じてそれを拒絕しても口惜しくはなかつたからですね。だが、待てよと、私も考へましたね、皇帝は何と言はれるだらうな？　それに昇進が——皆さん、お解りでせうね……諸君ッて、私やァ其奴等に言ひましたね、引請けますよ、確に引請けますよ。だが、私には、あゝ、私には油斷が成りませんよ……耳を欹てるッてえのは、私から始まつたことなんだからね！……それさへ承知なら……宜しい！　私やァ直に官衙へ出ますよ……で、役人どもを聚めて——只一つお叩頭をしました。すると、一同の者が白楊の葉のやうに慄へ上りました。（知事を始め其他の官吏ども恐怖に慄へる、クレスタコフ一層熱して言葉を續ける。）いや、戯談言つてるんぢァありませんよ、私やァ役人どもに盡く譴責を加へまし

た！　四等官でさへ私を怖がつて居るんですからね。又怖がるのも道理でさ。私やア左樣いふ人間ですよ……誰だつて構やアしない、誰にだつて遠慮はしませんよ……私やアあらゆる人々に言ふんです、俺は自分の權力を知つてるぞ、俺は自分の職分を知つてるぞ！　俺の居ない所はない、斷じてない。俺は毎日宮中へ行く……明日か明後日俺は元帥に成……成るだらう……（ふら〳〵と蹌めく。若し官吏どもが恭しく彼を支へなかつたら、床に倒れるところ。）

知事（全身を慄はせながら近づく。）閣ッ閣ッ……閣ッ閣ッ……閣ッ閣ッ……

クレスタコフ（氣が附く、荒々しく。）如何したてんだい？

知事　閣ッ閣ッ……閣ッ閣ッ……

クレスタコフ（前の如く。）解らないよ……眞個馬鹿げてらア！

知事　閣ッ閣ッ……下……下は少時御休息に成つた方が宜しくは御座いませんか……此處には閣下の御使用を仰ぐために必要の物を盡く揃へた部屋が御座います。

クレスタコフ　休めつて……馬鹿なことを言ふない！……あゝ、休息をね！……うむ、そりやア……非常に好いですな……御饗應は、皆さん――眞個立派でしたな……左樣――左樣ですとも……好いですな……鹽鱈……あゝ、味の好い鹽鱈！（知事を從へながら次の部屋へ行く。）

第七場

前場の人々。但し知事とクレスタコフを除く。

ボブチンスキ　ありやア男の中の男だよ、ドブチンスキ！……あゝ云ふのを僕は男の中の男と言ふんだ！　僕の生涯にあんな力のある人物の前へ出たことは一度もないね……僕ア餘り心配したので今少しで消えて失く成るところだつたよ。君は如何思ひますね、ドブチンスキ君、正味のところ何の位の地位なんでせうね？

ドブチンスキ　僕が考へるにやア、少くとも將軍でせうよ。

ボブチンスキ　併し僕の考へぢやア、將軍なぞは足許へも寄附けなからうと思ふんだがね！　で、縱しや將軍であるにしても、確かに總司令官に違ひないよ。お聞きでしたかい、あの人は四等官を冷遇したと云ふぢアないか。此方へ來たまへ、來たまへ、僕等アそれをカロープキンと地方判事とに話して遣らなくちやア不可ないよ。左樣なら、アンナ・アンドレエヴナさん！

ドブチンスキ　左樣なら、奧さん！　（兩人去る）

病院監督　（學校長に。）いや、怖ろしい事に成つたちやアありませんか。何しろ何處へ打擊が遣つて來るか知れないのですからね！……あゝ、私達ア未だ制服を着けて居ませんね！……で、あの方は——眼を覺ますと直に彼得斯堡へ手紙を遣つて、私達のことを密告するんですよ。（學校長と共に非常に銷沈しながら去る、退場せんとして言ふ。）左樣なら、奧さん、左樣なら！

第八場

アンナ・アンドレエヴナ。マリヤ・アントノヴナ。

アンナ　あゝ、何と云ふ立派なお方だらうねえ！

マリヤ　左樣ね、阿母さま、本當に立派でしたわね！

アンナ　それに、あの嫻雅な身の態度がねえ！　誰が見ても直ぐ眞實の都育ちだつてことが解るよ。あの嫻雅さとあの謙遜と——一口に言へば、皆が皆！……いゝえ、あの方は本當にぞく〳〵させるよ。あんな若い人を見ると、眞個惚れ〳〵しちまふわねえ！……あの時や本當に……本當にわれを忘れて仕舞つたよ……でも、まアあの方の方でも大分私が氣に適つたやうだ。そりやア最うちやんと見て置いてよ……だつて、私の方ばかり始終見て居たんだもの！

マリヤ　だつて、阿母さま、あの方は私の方ばかり始終見て居たのよ。

アンナ　何を言つてるんだよ、本當に、お前さんの馬鹿にも惘れるねえ！……お前、そんな事を言ふと、私も默つちや居られませんよ！

マリヤ　だつて、實際左樣なんですもの、阿母さま、あの方は私ばかり見て居たんですよ。

アンナ　あゝあ、お前さんは又私に盾を衝かうと思つてるんだね！　今日は最う十分だらうがね！……あの方がお前を見たつて！……一體、何處にあの方がお前を見る譯があるんだえ？

マリヤ　本當よ、阿母さま、あの方はちゃい〳〵私を見たんだわ、最初は文學の話を始める時でした、それから最一度はあの方が使節とポイストを遣つたお話をなさる時でしたわ。

アンナ　そりやァ左樣だらうさ——一二度位はそんな事があつたかも知れないよ……『さァ』つて、あの方は獨語を仰有つたらうさ。『あの女も亦一度位はちらりと見て置かうかな！』

第九場

前場の人々。知事。

知事（爪先で歩いて出ながら。）しッ……しッ……

アンナ　如何したんですね？

知事　あんなにがぶ〳〵飲まれては、眞個困つて仕舞ふね。だが、彼奴の言つた半分でも眞實だとしたら？（考へながら。）左樣だ、如何して眞實でないことがあらう？酒に醉へば本性が出る、心にあることが舌の先へ現れるものだ。實際、彼奴の話には多少嘘が混つて居るに違ひない。が、少しも嘘を混へまいと思つたら、話は一つも出て來ない筈だ！……彼奴が大臣と骨牌を取つて宮中へ出入りする……うむ、考へれば考へるほど……彼奴が何者だか、惡魔でもなけりや知るものか……俺は何うも眩暈がし

て來さうだ。何うも高い塔の上に立つて居るやうな心持だ。いや、それよりも絞首臺へ上る前のやうな心持だよ。

アンナ　私には少しも怖いなぞとは思へませんがね。私やたゞあの方を上品な、世間に明るい、起居振舞の精練された、立派な殿方だと見ましたよ。あの方の地位が高いなぞと云ふことには、私やア些とも迷惑しませんね。

知事　左樣、そんな事だらうと思つたよ、お前達のことならね！　女と云ふ奴ア、何か一つ氣に適ると、他の事なんざ全然考へて見ようともしないんだ！　又お前達から好い事を聞き出さうてえのは無理な話さ。現にお前の所天は瞞されて破滅に瀕して居る——お前が再び俺の名前を聞くことはあるまいよ。ねえ、お前は又ドブチンスキでも相手にしてるやうな了簡で、あの方を遇ふ氣で居るんだな。

アンナ　其點はね、何卒御心配なさらないやうに願ひますよ。私達もそんな差別位は心得てますからね……（意味ありげに娘を見る。）

知事　あゝ、お前達と話をしても無駄だ！……實際、何と云ふ事に成つたらう！　俺は未だ怖ろしいのが癒り切らないよ。（扉を開く。）ミーシュカ、巡査のスヴィスツノフとデルジェモールダを喚んで來い、二人とも何處か扉の近くに居なくちやア不可んよ……（少時沈默してから。）いや、世の中の事は、眞個不思議だよ……左樣云ふ人は大概容子でも見分けが着かうと云ふものだ！　だが、あの青二才ばかりは——彼奴が何者だか、誰にだつて解るかい……軍人なら少くとも或種の定つた特徴を持つて居る。で、平服を着ると翼を切られた蠅のやうに見えるもんだ……だが、何故あんなに永く宿屋に燻つて居たんだらうな？　で、此兩面の意味と此暗示——これで謎の解ける奴ア惡魔の外にあるまい！　だが、彼奴も到頭尻尾を出しやアがつたな。左樣だ、要のない事まで俺の前で饒舌つたものさ。いや、彼奴も未だ若い所があるんだよ。

第十場

檢察官

前場の人々。オーシップの方へ押寄せて指で彼を招く。

アンナ　まア お前、一寸此處へお出でよ。

知事　しいッ！……如何だい、あの方は未だ就床んでお坐かね。

オーシップ　えゝ、未だでさア、未だ寝そべつてますよ。

アンナ　一寸お話しよ、お前は一體何て云ふ名なの？。

オーシップ　オーシップと申します、奥さま。

知事（妻と娘に。）おい一寸其處を退いて呉れ！（オーシップに）如何だね、友達、お前は十分饗應を受けたかい。

オーシップ　十分ですとも、旦那に澤山お禮を言ひますよ。えゝ、えゝ、十分ですとも。

アンナ　さア私に話してお呉れな、お前の御主人は――何かい、まア伯爵や侯爵なぞと大層御懇意になすつて被坐しやるんだつてね？

オーシップ（傍白。）何と返辭をしたものかな？　此人達が俺に旨味い物を喰はせて呉れたんだ――此處で俺が左樣ですと言やア、多分最つと旨味い物を喰はせて呉れるだらうよ。（高い聲。）左樣ですとも、あの人は澤山伯爵方と交際してますよ。

マリヤ　あら、オーシップさんや、何てまア優しい人だらうね、お前の御主人は！

アンナ　何卒、まア話してお呉れよ、オーシップさん。如何してあの方は……

知事　まア少し默つて居て呉れないかね！　お前達やそんな馬鹿げた話で俺を外らかして仕舞ふんだよ。一寸聞かせ呉れないか、ねえ、友達……

アンナ　それで位は如何なんだい、お前の御主人は？……

オーシップ　まア……普通の位ですよ……

知事　お前の馬鹿げた質問なぞ、禿鷹にでも喰はせちまえ、お前は事件に關係のあることゝ云つては、唯の一語も言はないんだ。まア俺に話さないか、友達、お前の御主人は……非常に嚴格かね？　お前にでも怒りッぽい方かね、それとも赤ン坊のやうか

ね？

オーシップ　えゝ、あの人は何より秩序が所好ですよ。あの人にやア何でもきちんとしてなけりやア駄目ですね。

知事　ねえ、友達、お前の氣性はすつかり私の氣に適つたよ、お前は屹度正直な人間に相違ないね。若しお前が……

アンナ　お聞きよ、オーシップさん、お前の御主人は制服をお着けに成るか、それとも……

知事　好い加減に罷めないかい、此のくたばり損ひ奴！　非常に重大な時に際して、死ぬか生きるかの境だと云ふのに……（オーシップに。）處で、好い友達、お前は非常に俺の氣に適つたよ。まアお前も途中で一寸一杯位お茶を飲んだ處で差支へなからうがね。時候は未だ却々寒いよ——此處に二留布お茶の代があるよ。

オーシップ（金を取りながら。）何うも有り難う御座います、旦那樣！　貴方には神樣が長い壽命を授けて下さいませう！　いや、旦那方が少し我々貧乏人を助けて下さらなくちや困りますよ……

知事　あゝ、〳〵、俺も嬉しいよ……で、聞かせて呉れないか、友達……

アンナ　ねゝ一寸、オーシップさんや、お前の御主人には何んな色の眼がお氣に適るんだい？……

マリヤ　あゝ、私の所好なオーシップさんや、お前の御主人は何と云ふ品の好い鼻を有つてお坐だらうねえ！

知事　忌々しい奴等だなア。まア俺にも物を言はせろよ……（オーシップに。）おい友達、賴むから俺に聞かせて呉れ、お前の御主人は旅行中何に一番注意されるんだい、——つまり其の、何が一番あの人の氣に適るんかね。

オーシップ　あらゆる事を調べて廻るのが所好なのですよ……其中でも、好く待遇されて、好く饗應されるのが所好ですね。

知事　好く饗應されるのが……？

オーツップ　えゝ、非常に好く……私やアたゞ奴隷に過ぎませんがね――だが、私迄大切にされやア、あの人は氣持が好いんですよ、……あゝ左樣だ、例へば或日なんざ、二人で或處へ旅に出ましたがね。『おい、オーシップ』つて、あの人が言ふんですよ。『お前は滿足したか。好く饗應されたか？』つてね――『好くないんです、閣下』と、私が言ひました。すると、あの人が『あゝ！　それぢや彼奴は無賴漢だ、俺達が泊つた家の奴は！』つて、あの人は言ふんでさ。『又彼處を通る時には、忘れないやうに俺に注意して呉れ』つてね――『あゝ』と、私や一人で考へました。（手を動かしながら。）『彼奴は屹度お譴責を受けるだらうよ』と。

知事　うむ。いや、お前は却々旨く返答が出來るね。今お前に少し許りだが茶代を遣つたね――其處へ又幾許かビスケットを買ふ金を上げるよ。

オーシップ　おゝ、旦那樣、貴方は眞個寛大なお方ですね！　（金を取る。）私や貴方の健康を祝つて一杯遣りますよ。

アンナ　さア、オーシップさんや、此處にも些とばかりだが私から上げるよ。

マリヤ　私の所好なオーシップさんや、それぢやアこれでお前の御主人の健康を祝つてお飲みよ。（クレスタコフの咳嗽が次の部屋から聞へる。）

知事　しつッ！（皆爪先で歩く。次の事が低聲で語られる。）神樣の罰が當るよ！　そんな喧騒をするとね！　外へお出で、何のためにお前達や此處へ這入つて來るんだい？……

アンナ　彼方へ行かうね、マリヤ！　私が好い事を話して上げるよ、あのお客樣のことで私が氣附いたことなんだよ――そりやアね、私達が二人だけに成つた時でなければ話されないことなんだよ。

知事　何時そんな話の際限が附くんだい、まアお出でだの、話して上げるだの、內密だのと！……俺の耳は本當にがん〳〵鳴り出して來るぜ！（オーシップに。）さア、友

達……

第十一場

前場の人々。デルジエモールダ。スヴイスツノフ。

知事　しつッ！　此の脚曲りの熊野郎奴！　其長靴と一緒にくたばつちまやアがれ！　宛然千磅もあるやうにがた〳〵音をさせやアがる――俺は又何か荷車から轉がり出したんだと思つたよ。如何して又お前達や此處へ這入つて來たんだい？

デルジエモールダ　私どもは御命令を受けましたので……

知事　しつッ！（手を口に當てる。）何と云ふ聲だい、鴉のがあ〳〵啼くやうな！（身を慄はす。）『私どもは御命令を受けました』だつて……！　そんな牡牛が樽の中で吼えるやうな聲をされやうとは、誰が思ふかい！（オーシツプに。）さア彼方へお出で！　そして、御主人の御用をすつかり準備しときなさいよ。家の中にある物は自由に使つて可いからね。（オーシツプ去る。）それでお前達は階段へ歩哨に立つて居ろ――其處から一寸でも動くことは成らんぞ！……それに見知らぬ者は一人も家へ入れては成らんぞ――特に商人をだね！　一人でも入れようものなら、お前達や何れ其の酬いを受けなけりやア成るまいぜ。そこで……特に哀願狀を持つて來る奴が一人もないやうに注意するんだぞ――左樣だ、縱令哀願狀でないにしろだ――遠くから見て、俺の許へ哀願狀を持つて來さうな奴は、何人も入れるな……そんな奴は斯んな風に待遇つて遣るんだ――烈しく、力强く、憤然として、一口で言やア跳り上つて！（誰をか蹴るやうな身振をする。）解つたか？　しつッ……しつッ!!……（巡査を押退けながら、爪先で歩み去る。）

第四幕

知事邸の前幕と同じ部屋。

第一場

地方判事。病院監督。郵便局長。學校管理官。ポプチンスキ。
ドプチンスキ。凡ての人々正裝して、爪先にて用心深く歩み入る。
此場は終りまで私語の調子を用ふ。

地方判事（一同を半圓形に配列す。）後生ですから、諸君、早く半圓形を作つて下さいよ！　何よりも先づ秩序ですからね！　素張しい顯官――考へて御覽なさい、あの方は朝廷へ出入して、四等官を嗾鳴り附けるんですよ。軍隊式に整列しませう、諸君、左樣、左樣、軍隊式に！　貴方、ポプチンスキさんは此方の側ですよ。それで貴方は、ドプチンスキさん、此處へ哨兵に立つて下さい。（ポプチンスキとドプチンスキは爪先で急ぎながら命ぜらた地位に就く。）

病院監督　そりやア貴方のお言葉にも從ひますがね、判事さん、私どもは是非一つ冒險をして見なけりや不可ませんよ。

地方判事　何んな冒險ですな？

病院監督　大抵お解りでせう、私が言つてることは？

地方判事　握らせるつて事ですか。

病院監督　左樣です、如何しても此處で一つ握らせなけりやア成りませんな！

地方判事　だが、危ない話ですね……それを騷ぎ立てられたら……何しろ先方は政府の役人ですからね！……まア、何か贈物のやうにして、我々貴族仲間の記念の意味で捧呈したら可いかとも思ひますがね？。

郵便局長　それとも、斯うしたら如何でせうね。つまり其金子を郵便で送つて遣るんですよ――左樣すりや、誰から出たんだか解りませんからね。

檢察官

病院監督　御用心なさい、あの方は貴方を郵便で何處か遠方へ送つて仕舞ふかも知れませんよ。まア秩序の整つた國では、斯んな事件を左樣いふ風には取扱ひませんよ。我々が斯うして列を組んで此處へ遣つて來たのは何のためですか？　つまり我々が一人であの方の前へ出て、面と向ひ合つて相談した方が、未だしも好いからでせう？左樣すりやア……左樣すりやア此事件の片も附きますよ。其後で誰がぐづ〳〵言ふものがありませう？　上流社會でも矢張左樣いふ風にするんですよ！　そこで判事さん、貴方が眞先に遣つて下さらなきや不可ませんね。

地方判事　いゝえ、貴方こそ——あの方は貴方の病院で朝飯を召上られたぢやありませんか。

病院監督　いえ、いえ、いえ！それぢやア校長さんが青年の敎育者としての立場から眞先にお目見得をされるのが至當ですな。

學校長　いゝえ、私にや出來ませんよ、如何して私にや出來ませんよ。白狀しますと、私はな、自分より一寸でも地位の高い役人と話をすることに成りまするとな、直に頭がぐら〳〵として、舌が鉛でも載けたやうに重く成るんですよ。いゝえ、皆さん、何卒私はお免し下さい！

病院監督　左樣すると、判事さん、貴方がなさらにや、誰もする者はありませんよ。眞個貴方の辯舌はシセロの再生かと思はれる位ですからね。

地方判事　あゝ、何シセロですつて！　途方もないこと！　私が一寸輿に乘つて、獵犬や飼犬の話をした位で……

皆々（彼を取り卷いて。）いや、いや、貴方は獵犬ばかりぢやアない、御馳走も獻立も熟く御存知ですよ……いゝえ、判事さん、貴方が私どもを見捨てゝは困りますよ。私どもの親に成つて下さいましな……いえ、いえ、判事さん！

地方判事　お放し下さい、諸君……（此瞬間隣室にクレスタコフの足音と咳と唾を吐く音とを聞く。皆々遽てゝ扉口へ飛び附き、押し合ひへし合ひ、我勝ちに扉外へ出よう

として爭ふ。到頭、彼等はそれに成効する。互に押潰されたりへし潰されたりして、殆んど絞め殺されるやうな叫喚を聞く。)

ポチンスキの聲　うあッ、ドブチンスキ君、痛いッ、たッ、たッ、た！　君ア僕の足を踏んでますよ！

病院監督の聲　あゝ苦しい、切ない、少し退いて下さい——私や魂を身體から壓出され相ですよ……あゝ、息が塞りさうだ！……最う駄目だ、死んで仕舞ふ！(なほ若干の叫び、例へば『あ痛ッ、痛ッ！　あゝ苦しい！』なぞと云ふ叫聲を聞く。到頭、皆皆扉外に出て、部屋が空に成る。)

第二場

クレスタコフ(一人、寢過ぎた人の外觀。)

クレスタコフ　いや、すつかり寢込んで仕舞つたらしいな。何處から蒲團だの毬毛だのを斯んなに持つて來やアがッたんだ？　お蔭でびつしより汗を搔いちやつたぜ。俺ア昨日の朝飯に大分醉拂つたらしいわい、今でも未だ眩暈がするやうだ……まア俺の見るところぢやア、當分此處で愉快に暮せらア。俺はあんなお人好が所好だよ。尤も、彼奴等が慾得づくからでなく親切から欵待して呉れりやア、最つと俺の氣に適るんだがね……で、知事の娘——うむ、あれも惡かアないな……それに又あの阿母が素敵な姥櫻だよ……未だ如何して……いや、眞個斯んな生活なら何時でも持つて來いだよ。

第三場

クレスタコフ。地方判事。

地方判事(躊躇しながら登場す、傍白。)神樣、私の神樣、何卒私が旨く切拔けるやうにお守り下さい！　何うも膝が慄へるぜ！(高い聲、手に帽子を持ちながら劍のやうに直立して居る。)恐縮ながら申上げます、手前は地方判事で八等官のリヤブ

キン＝チヤブキンと申す者で御座います。

クレスタコフ　何卒お掛け下さい……では、貴方が此地方の判事ですね？

地方判事　十五年前に、私は此地方の貴族仲間から三年の期間で指命されたのですが、今なほ其地位を維持して居るので御座います。

クレスタコフ　恐らく非常に有利な地位なんでせうね？

地方判事　三年の期間で三度指命されましてから、私は政府の推薦狀と共に第四級ウラジミール勳章を戴きましてな。（傍白。）俺の掌の中ぢや、金子が眞赤に燒けて爛れさうだわい。

クレスタコフ　ウラジミール勳章は好う御座んすね。あれは聖アンナ勳章より三級だけ優つて居るんですよ。

地方判事（握つた手をやゝ前へ出しながら、傍白。）神樣、俺にや最う如何して可いか解らない！　宛然眞赤に燒けた石炭の上に坐つて居るやうな氣持だよ。

クレスタコフ　何を貴方は手に持つて居られんです？

地方判事（頭がぐら〳〵として銀行劵を取落す。）何にも持つちや居ませんよ。

クレスタコフ　えゝ、何にも持つて居ない？　現に貴方は金子を落したぢやないか。

地方判事（全身を慄はせながら。）あゝ、いゝえ……私や何にも持つて居ません！（傍白。）あゝ、失敗つた！　俺は最う西伯利亞行に定つたよ！

クレスタコフ（銀行劵を拾ふ。）これは金子ぢやアありませんか

地方判事（傍白。）萬事休す矣——失敗つた、失敗つた！

クレスタコフ　如何でせう、私にこれを借して下さらないか！

地方判事（非常に熱心に。）えゝッ、何で御座います？……そりやア最う身に餘る光榮と存じまして！（傍白。）勇氣を出せ、勇氣をッ！　あらたかな聖母樣、此急場から私を救つて下さいませ！

クレスタコフ　ねえ貴方、私も途々彼れだの此れだのといろんな出費がありましてな

それに私も自家へ歸りさへすれば、直に又送つて返しますよ。

地方判事　いや、決してそれには及びませんよ。御用に立つだけでも、私の身に過ぎた光榮で御座いますからね……私の微力を以て只政府に對する熱心と忠誠から……常に貴方方の御滿足を得るために……努めて居る次第で御座います……（立ち上つて、小指を洋袴の縫目に當てながら、官吏らしい態度を取る。）私は此上貴方の貴重な御時間を費させることは敢てしません。何か私に御命令を與へて下さいませうか。

クレスタコフ　何んな命令ですか？

地方判事　此土地の地方裁判に關した御命令で御座いますよ。

クレスタコフ　如何したッてんです、そりやア？　私やそんな事に何の關係もありませんよ。いや、實に有難う御座いました。

地方判事（お叩頭をして去る。傍白。）到頭落城に及んだわい！

クレスタコフ（獨白。）好人物だな、あの地方判事は！

第四場

クレスタコフ。郵便局長。正裝して登場する。

郵便局長（恭慇な態度、劍の鞘に添うて手を垂れて居る。）恐縮ながら御披露いたします。郵便局長で七等官のシュペーキンと申しまする。

クレスタコフ　あゝ、好くお出でなされた！　私は愉快な友達が所好でしてな、まアお掛けなさい。此土地に永くお住ひですか。

郵便局長　はい、左樣で御座いまする、閣下。

クレスタコフ　此町は大層氣に適りましたよ。勿論人口は餘り多くない――だが、此處は首府ぢやありませんからね！　左樣ぢやありませんか。如何したつて首府のやうにや行きませんよ。

郵便局長　眞個お言葉の通りで御座います、閣下。

クレスタコフ　本當に言葉附が好いのは、首府の人だけですね――田舍のやうに鵝鳥みたいな聲の奴は居ませんよ。君は如何思ひます？　私の考へは間違つてますかね。

郵便局長　眞個お言葉の通りで御座います、閣下。（傍白。）此人は少くとも尊大ぢやアないね。何でも話して呉れるよ。

クレスタコフ　だが、住めば首府と言つて、何んな小さな町でも幸福に暮すことは出來ますね――左樣でせう？

郵便局長　はい、御尤もで御座います、閣下。

クレスタコフ　では、貴方に伺ひますがね、人間が幸福に暮すためにやア、何が必要なんでせうね？　たゞ他人から、尊敬されて可愛がられさへすりやア可いんでせう――間違つてますかね。

郵便局長　眞個お言葉の通りで御座いますよ、閣下。

クレスタコフ　貴方と意見が同じなのは嬉しいですね！　私は好く變人だなんて言はれるが、眞個そんな性質がありますよ……（相手の眼を見る、傍白。）一つ此郵便局長からも金子を借りて遣らうかな。（高い聲。）いや、私や飛んだ目に遭つたのですよ。途中で永くぐづ〳〵して居たものですからね。如何でせう、私に三百留布許り借して下さいませんか。

郵便局長　えゝッ……何で御座います！……そりやア最う喜んで！　さ、何卒これをお受取り下さるやうにお願ひ致します。其他何なりと仰有り附けて下さいませ……。

クレスタコフ　何うも有難う。ねえ貴方、私は旅行中不自由を我慢することが大所嫌でしてね――何のためにそんな我慢をするのです？　左樣ぢやありませんか。

郵便局長　眞個お言葉の通りですよ、閣下！（立ち上る、官吏風に。）私は閣下の貴重な御時間をこれ以上浪費させることは敢てしません……郵便事務に關して何か御注意を下されませうか。

クレスタコフ　いや、そんな事は全然ありませんよ。（郵便局長も叩頭して去る。クレ

スタコフ一人、卷煙草に火を點ける。）あの郵便局長も何うも非常な好人物らしいて。少くとも世話所好だよ――あんな人物が俺の氣に適るんだ。

第五場

クレスタコフ。學校長、どさ〳〵と部屋へ突き込まれる。

聲（學校長の背後から。）如何して又そんなに心配するんですね？

學校長（慄へながら官吏的態度で。）恐縮ながら申上げまするで御座います、私は學校長で九等官のクロポフと申すもので、はい。

クレスタコフ　あゝ、好くお出なされた！　まアお掛けなさい、お掛け下さい、卷煙草は如何です？（卷煙草を一本渡す。）

學校長（まご〳〵して、傍白。）あゝ神樣、斯んな事があらうとは夢にも考へて居ませんでした、私はそれを受けたものか、辭退したものでせうか。

クレスタコフ　お取りなさい、お取りなさい。こりやア好い品ですよ。勿論、首府から來たんぢやありませんがね。實際、彼處ぢや、小父さん、私は一本五ジルベルグロッシェンの卷煙草を喫つてるんですよ――えゝ、これを喫つた後ぢや指迄舐りたくなりますぜ。ほら、此處に燧火がありますよ。さアお喫ひなさい！（喫煙用燧を渡す。）

學校長（喫はうとして全身を慄はす。）

クレスタコフ　をや、貴方は卷煙草を倒さに銜へてますね！。

學校長（驚いて卷煙草を投げ捨て、唾を吐きながら、不安らしく左右を振り返る。傍白。）惡魔にでも喰はれッちまえ！　何と云ふ臆病だい！

クレスタコフ　私の見るところぢや、貴方は何うも喫煙の友達ぢやアないやうですね。實はこれが私の弱點なんですよ。尤もそれが唯一の弱點と云ふ譯でもありませんさ――と云ふのは、異性に對しても決して平氣ぢやア居られない質なんですからね。貴方は如何です？　何方が多くお氣に召しますね――黑髮の美人と金髮の美人と？

學校長　（當惑して、一言も發することが出來ない。）

クレスタコフ　まア貴方も遠慮なく仰有いよ、黑髪の美人と金髪の美人と何方を撰みますか。

學校長　私にやア何とも申上げられませんので……

クレスタコフ　え、何ですつて、まア打明けて仰有いよ。私やア何が何でも聞かなきや置きませんね、何んな趣味を貴方が持つて居られるんだか……

學校長　では、御免を蒙つて、斯樣に申上げたいと思ひます……（傍白。）俺は何を言つてるんだか、自分でも解らないよ。あゝ眩暈がする……

クレスタコフ　あはは！　貴方は如何しても白狀しませんね！　私や保證しますがね、何でせう、或年若の黑い髪が貴方を愚弄したんでせう。まア白狀なさいよ……左樣ちやありませんか。

學校長　（沈默。）

クレスタコフ　あゝ、貴方は赧く成りましたね！　そら、そら！　何故貴方は言はうと思はないんですね？

學校長　私やア最うまご〳〵して、情深い……高貴のお生れ……閣……下……（傍白。）えゝ、此舌が思ふやうに成らぬわい！。

クレスタコフ　まご〳〵する！　左樣、實際私の眼には相手をまご〳〵させるやうな力がありますよ。少くとも女ぢや一人として此眼に耐へ得たものはありませんね——貴方は如何思ひます、それを？

學校長　お言葉は全く以て御尤も至極でお座います、閣下。

クレスタコフ　私や目下妙な境遇にあるんですよ。途中で大分獻を盡しましてね。私に三百留布程借して下さいませんかい。

學校長　（衣囊の中で金を握る、傍白。）ど、如何したと云ふんだ！　はい、畏まりました此處に、此處に！（慄へながら銀行劵を渡す。）

クレスタコフ　いや、何うも有難う。

學校長　私は此上長居をして、貴方の御迷惑に成ることは憚りますので……

クレスタコフ　左樣なら。

學校長（殆んど走るやうにして去る、傍白。）あゝ、神樣は有難い、辱けない！　あの人は最う學校へは來ないだらうよ！

第六場

クレスタコフ。病院監督、官吏的態度及び正裝にて登場す。

病院監督　恐縮ながら申上げます、私は病院監督で七等官のジェミリャニカで御座います。

クレスタコフ　今日は。何卒、お掛け下さい。

病院監督　私は昨日貴方を御案内して、親しく私の監督に委ねられた病院を檢分して頂く光榮を荷ひました。

クレスタコフ　あゝ、左樣でしたね、記憶えて居ますよ。あの節は大分御馳走に成りましたね。

病院監督　私は一身を祖國のために捧げ得ることを自分の最大幸福と存じて居ますので……。

クレスタコフ　私の弱點を白狀せんけりや成りませんがね——私やア眞個好い料理が所好ですよ……處で、貴方は昨日から見ると、大分肥られたやうぢやありませんか——貴方にや左樣思はれませんか。

病院監督　誠に有難う御座います。（少時沈默した後。）自分のことを申すのも異なものですが、私は自分自身のためには何一つ求めませんので、全然自己を社會の幸福のために犧牲に致して居るので御座います。（椅子を更に近く進めて、低聲に語る。）まア、あの郵便局長を御覽なさいまし——彼奴は丸々何にも爲ないのですよ。仕事と云ふ

仕事は等閑にして、小包は何時迄も引留めて置くんですね……まア一つ御自身で臨檢して御覽なさいまし！　それにあの地方判事、少時前に此處へ參りましたでせう――彼奴も兎を獵る外に何にもしないので御座いますよ。犬迄も裁判所へ連れ込みましてね。それに、あの男の素行と申しましたら――彼奴は私の親類でもあれば又友人でも御座いますが、何うもそれを貴方の前に御披露せずには居られないんですよ、何しろ此土地の幸福に係はりますことで御座いますからね――あの男の素行と申しましたら、實際酷いんですよ……此土地に地主のドブチンスキ君といふ男がありますがね――あゝ、最う貴方にも紹介される光榮を得たもので御座いますな――此男が未だ閾を跨いで出ない間に、直ぐ地方判事が遣つて來て、其細君と宜しく交際するんで御座いますよ……私やァ實際それを誓つても宜しう御座います……そりやァ最うあの子供を御覽なさりさへすれば解りますよ。一人だつてドブチンスキに似た子はありませんからね。（いい、いい！）あべこべに一番下の女の子まで地方判事に生寫ですよ。

クレスタコフ　驚きましたねえ。眞個そんな事があるんですかい。

病院監督　それに、あの學校長と申しましたら……私にやァ如何して政府があんな男にあれ程の職務を與へて置くのか解りませんな。彼奴はジャコビン黨員よりも未だ惡い奴ですせ……青年に怖るべき教義を注入するんです……貴方にはそりやァ迚もお考へに成れないでせうね。若し宜しければ、それを紙に書いて差上げませうか……

クレスタコフ　左樣、左樣、左樣して下さい。そりやァ面白いでせうよ。私やァ退屈した時に、左樣いふ面白いものを讀むのが所好ですからね……處で、貴方のお名は何と云ひましたかね。何うも胴忘れをしましてな……

病院監督　ジェミリャニカと申します。

クレスタコフ　あゝ、左樣、ジェミリャニカさんでしたね。それで一寸伺ひますが、貴方はお子供衆がありますか。

病院監督　はい、五人ありますよ。二人は最う成人しました。

クレスタコフ　あゝ、最う成人した！　それで何ですか……何と云ふ……

病院監督　何と云ふ名前かと仰有るので？

クレスタコフ　えゝ、何と云ふ名前ですか

病院監督　ニコラス、イワン、エリザベス、マリヤとペルペチアで御座います。

クレスタコフ　皆好い名前ですね。

病院監督　私は此上長居をして、貴方に御迷惑を懸けたり、又は貴重な御時間を盗んだり致しますことは出來ませんので――貴方は其時間を神聖なる義務の履行にお捧げなさるので御座いませうな……（お叩頭をして、扉の方へ行く。）

クレスタコフ（一緒に連れ立つて出ながら。）いや、決して迷惑なことはない。非常に面白い話を伺ひましたよ……最一度お遣んなさると可いです……要するに、そんなやうな話が私やア所好ですよ。（立戻つて扉を開け、彼の背後から喚ぶ。）あゝ、貴方！　まア最一度言つて下さい……忘れて仕舞ひましたよ、貴方は何と云ふお名前でしたかね……

病院監督　アルチェーミ・フィリポヴィッチ・ジェミリャニカと申します。

クレスタコフ　いや、何うも失禮しました、アルチェーミ・フィリポヴィッチさん。私やア途中で一寸妙な目に遭ひましてね――永く引止められて居たんですよ……私に四百留布許り借して下さいませんかね。

病院監督　は、宜しう御座いますとも。

クレスタコフ　あゝ、何うも有難う。心から感謝しますよ。

第七場

クレスタコフ。ポブチンスキ。ドブチンスキ。

ポブチンスキ　恐縮ながら申上げます。私は此町の住民で御座いまして、名前はピートル・イワノヴィッチ・ポブチンスキと申します。

ドブチンスキ　地主のピートル・イワノヴィッチ・ドブチンスキと申します。

クレスタコフ　あゝ、私やア最う貴方を知つてますよ！　貴方でしたね、私の部屋へ轉がり込んだのは？　あれから貴方の鼻は如何しました？

ポブチンスキ　神樣のお蔭で、最う癒りました、すつかり癒つて仕舞ひましたよ。何卒最う御心配なさらんで下さいまし。

クレスタコフ　最う癒りましたか？　あゝ、そりやア結構ですね。私も嬉しいのですよ……（不意に粗野な口調で。）貴方方は金子を持つてますか。

ポブチンスキ　金子？　如何するんで御座います、其金子を？

クレスタコフ　一千留布だけ私に借して下さい。

ポブチンスキ　あゝ神樣、そんな大金を！　いや、私や持つて居ませんよ。君、ドブチンスキ君、君はそれだけ持つて居るかい。

ドブチンスキ　いや、僕もそんなに持つちや居ませんよ。君も知つてる通り、僕の金子は皆慈善團の金庫に預けてあるからね。（註曰、國立銀行の設立前に貯蓄銀行の用をなせしもの。）

クレスタコフ　まア一千留布はないにしても、確か百留布位はあるでせう。

ポブチンスキ　（衣囊を搔き廻しながら。）ドブチンスキ君、君は持つて居ませんかね。僕は銀行紙幣でたつた四十……。

ドブチンスキ　（同じく衣囊を探しながら。）僕ア底を叩いても二十五留布ッ限り持つてませんよ。

ポブチンスキ　最一度好く搜したまへ、ドブチンスキ君！　僕はちやんと見て置いたよ、君が右の衣囊に何か押込んだのを――右の方だよ……

ドブチンスキ　いや、確かにないよ！　眞個空だよ。

クレスタコフ　まア、そりやア如何でも好う御座んす。僅か六十五留布にしろ……まアそれでも好う御座んすよ。（金を取る。）

ドブチンスキ　此處に一つ極めてデリケートな問題をお伺ひしても宜しう御座いませうか。

クレスタコフ　で、如何いふ事です、そりやア？

ドブチンスキ　はい、それは極めてデリケートな性質を帶びて居まして――卽ち私の長男は私どもの結婚の少し前に生れたので御座いましてな……

クレスタコフ　成程！

ドブチンスキ　斯う云ふ譯で御座いますよ。其子は本來私ども夫婦の間に出來たのですから、私どもの結婚と共に當然私の家へ引取られたので御座います。處で、私は矢張法律上にも私の子として認知して遣りたいので、つまり私と同じやうにドブチンスキを名告らせて遣りたい希望で御座いますがね。

クレスタコフ　成程、そりやア決して出來ないことぢやありませんよ。

ドブチンスキ　私は決して御迷惑を懸ける氣はありませんので、たゞ長男の優れた才能を思ひますと、……あの子は實に有望な子で御座いましてな……彼兒は詩と云ふ詩を悉く諳んじて居るんですよ。それに小刀を宛てがひますと直に小さな車を製作いたしましてな、宛然手品師のやうに上手で御座いますよ。そりやア最う此のボブチンスキ君が證人に立つて呉れます。

ボブチンスキ　左樣です、あの子は驚くべき才能を持つてますよ。

クレスタコフ　成程、成程！　私や一つ其子に肩を入れませう、其事件は直に報告して置きますよ……多分……そりやア最う直に解結が着きませう……あゝ、好う御座んすとも……（ボブチンスキの方へ振向いて。）それで、貴方は何も私に言ふことはありませんかい。

ボブチンスキ　あゝ、はい、私は全然違つたお願ひを持つて居るんですが……

クレスタコフ　で、それは？

ボブチンスキ　餘り大膽なやうで御座いますが、彼得斯堡へお歸りに成りましたら、い

ろんな權勢のあるお方々、元老院議官や將軍に仰有つて下さいませんか、閣下、此町にピョートル・イワノヴィッチ・ポブチンスキが住んで居るんだてえことを。えゝ、此外にやア何にもお願ひすることは御座いませんよ――ですから、何卒仰有つて下さい、彼處にピョートル・イワノヴィッチ・ポブチンスキが住んで居るんだつてね。

クレスタコフ　あゝ、好う御座んすよ。

ポブチンスキ　で、若しひよつとして皇帝のお耳に這入るやうなことが御座いましたらね、さア、其時も矢張皇帝に仰有つて下さいまし、皇帝陛下よ、あれがピョートル・イワノヴィッチ・ポブチンスキの住んで居る町で御座りまするつてね。

クレスタコフ　あゝ、好う御座んすとも。

ドブチンスキ　長い間お邪魔を致しまして、何卒お許し下さいませ。

ポブチンスキ　長い間お邪魔を致しまして、何卒お許し下さいませ。

クレスタコフ　そんな事はありませんよ、お互に愉快でした。（二人を送り出す。）

第八場

クレスタコフ。（獨白。）

クレスタコフ　此土地にやア隨分いろんな官吏が居るね。何うも彼奴等は俺を非常な高官だとでも思つて居るらしいよ。だが、俺も昨日は彼奴等の眼に左樣思はせるやうな砂を撒いて置いたがね。は、は、それにしても、何と云ふ馬鹿な奴等だらうな！　此奴は一番トラピチキンに手紙で知せて遣らざ成るまい――好い三面記事の材料に成るだらうよ。彼奴が又何んなに笑ふだらうな！（喚ぶ。）おい、オーシップ、筆とインキと紙を持つて來い！（オーシップ扉口から覗き込んで答へる、『只今。』）だが、あのトラピチキンと云ふ奴が……彼奴に面白い材料を手に懸けさせたら……俺もトラピチキンにやア用心しなけりや成らんぞ……彼奴が馬鹿な話や洒落を賣附けにかゝつたら、自分の親爺でも犧牲にし兼ねまい……何しろ金子に懸けては目のない男だからな……

處で、此町の役人どもは心からお人好なんだね……俺に金を借したのは、眞個彼奴等の美點だよ……左樣だ、最う何れだけに成つたか一寸調べて見ようや……地方判事から三百、郵便局長から同じくと、それで六百に成る。六、七、八と……急に財布が重く成つたぢやアないか！……八百、九百と……ほッほ！　最う千以上に成つてるよ……さア大尉の先生、最一度遣つて來ないかな……今度こそ、最うお前なぞの術に乘るんぢやアないよ。

第九場

クレスタコフ。オーシップ、筆とインキと紙とを持つて來る。

クレスタコフ　おい、馬鹿お前は此處で斯んな饗應に會つて有難いとは思はないかい。（書き始める。）

オーシップ　有難いと思つてますとも。眞個、旨く行きましたね。だがね、イワン・アレキサンドロヴィッチさま！。

クレスタコフ（書きながら。）あゝ、何だい？

オーシップ　風を喰つちやいませう！　今が好い潮時ですせ！

クレスタコフ（書きながら。）何を言つてるんだい、馬鹿！　一體、何故だ？

オーシップ　えゝ、私やア貴方のためを思つて勸めるんですよ。彼奴等にやア最うおいらばですね、此町の奴等にでさ。私等ア最う二日といふもの立派に面白く暮しやしさらばですね、此町の奴等にでさ。私等ア最う二日といふもの立派に面白く暮しやしたーーこれで最う澤山としやせう。何のために永く斯んな處に居候をして彷徨いてるんですね？　最う彼奴等にやア唾を吐き掛けてお遣んなさいよ！　何時迄旨い事が續くもんぢやアない。此次にや何んな思ひ懸けない奴が遣つて來るか知れませんよーー其時こさア天道樣、何卒私どもを救つて下さいませ！　此處にやア立派な馬がありますせーーー一つ馬車で駈け出しやせう！……

クレスタコフ（書きながら。）いや、俺は最少し此處に居ようと思ふんだ。明日の朝早

くで可いぢやないか。

オーシップあゝ、あゝ、明日の朝……神に懸けて、今立退いた方が可いですよ、イワン・アレキサンドロヴィッチさま、今直に此處を立退いた方が。貴方の利益にも名譽にも成ると思いやすがなア……ねえ旦那、彼奴等は貴方を誰かと間違えて居るんですよ……それに、餘り永く外出をして居なさると、親爺樣の御機嫌が氣遣はれますね……實際、今なら滅法好い驛馬が取れますぜ——此處の一番好い奴が……

クレスタコフ（書きながら。）可矣、解つた。兎に角此手紙を出して來て呉れい——それから直に馬車の用意をしても可いよ。だが、せいぜい好い馬を持つて來るんだぞ。で、馭者にも言つて置くが可い、全一留布の酒代を與るつてな。だが、序に一つ宮庭早飛脚の一隊を引連れて、途々喇叭を吹かせて歩きたいもんだな……（書き續ける。）トラピチキンの奴、嘲笑ひ倒けることだらうな……

オーシップ　如何でせう、旦那、手紙は召使を出しに遣つて、私やア其間に荷作りをした方が可いと思ふんですがね。左樣すりや時期を失ひませんからね。

クレスタコフ　宜しい。先づ俺に燈火を持つて來て呉れ。

オーシップ（退場して舞臺裏で言ふ。）おい、兄弟！　お前、此手紙を持つて行くんだよ……そして、郵便局長にそれを免税で出すやうに言ふんだ。それから直に俺の主人へ三頭立の馬車を寄起すやうに言ふんだよ、早馬を——一番好い奴だぞ！　それで拂ひは、俺の主人の方ぢやしない——そりやア悉皆國庫の支出に成るんだと、局長に言ふんだよ。それで、何に據らず俺の主人に憤られないやうに速くしろつてな。待て〳〵、手紙は未だ出來上らないんだよ。

クレスタコフ（書き續けながら。）彼奴は今何處に居るんだらうな——郵便街だらうか、それとも豌豆街だらうか。彼奴は始終住所を變へてばかり居るからな——勿論、家賃なぞ拂はないでさ。まア舊の住所の郵便街へ名指して遣ることにしよう。（手紙を折つて宛名を書く。オーシップ燈火を持つて出る。クレスタコフ手紙の封を

する。）

デルヅエモールダの聲（舞臺裏で。）停まれッ！　老耄の胡麻鹽髯奴、何處へ行くんだ？貴樣達に言つて置くが、此處へは勝手に出入が出來ないんだぞ。

クレスタコフ（オーシップに手紙を渡しながら。）さア、これを渡して呉れい。

商人の聲（舞臺裏で。）ねえ、小父さん、入れて下さいよ。そんなに言ふもんぢやありません、私達は用事があつて來たんですからね。

デルヅエモールダの聲　えゝ、去け、去かんか！　あの方は眠つてお坐だから面會はしないんだ。（騷ぎが大きく成る。）

クレスタコフ　如何したんだい、オーシップ？　一寸行つて見ろ、何を騷いで居るんだ？

オーシップ（窓の外を見ながら。）商人が這入つて來ようとするのを、巡査が突き出して居るんですよ。彼奴等ア手に〳〵紙片を振つてまさア――何うも貴方にお目に懸りたいやうですせ。

クレスタコフ（窓に進み寄りながら。）お前達は如何したんだね？

商人の聲　お助けなすつて下されませ！　旦那樣、哀願狀が採られますやうに申附けて下されませ。

クレスタコフ　おい、這入らせて遣れ……可いから這入らせろよ。オーシップ、お前行つて、這入らせるやうに言つて來い！（オーシップ行く。クレスタコフ窓から差出された哀願狀を受取つて、讀む。）『最も尊貴なる閣下、財政官閣下、商人アブヅーリン拜』……何だい、こりやア？……何と云ふ稱號を奉りやアがるんだい！

第十場

前場の人々。商人、酒壜を入れた籃と砂糖塊を持つて出る。

クレスタコフ　お前方は何を願ひ出たんだい？

商人一同　私どもは貴方樣のお慈悲を願ひに罷出まして御座ります

クレスタコフ　一體、如何して呉れと云ふのかね。

商人一同　私どもを飢ゑさせないで下さりませ、旦那樣！　私どもは酷い、不正な目に遭つて居るので御座ります。

クレスタコフ　誰のために？

商人の一人　知事のお蔭で御座ります。あんな惡い知事は、旦那樣、未だ見たことも御座りませぬ。あの人は私どもを非常な不幸に投げ入れました。一々申上げられない程で御座ります。あの人は、いつぞ一ト思ひに縊れて死んだ方が優しな程、私どもを苦しめます。死んで仕舞へば、一度で濟みますからね。あの人は、誰の見境なしに人の髯を捕まへましてな、斯う申すので御座ります、『貴樣は韃靼の犬だぞ！』つて。あゝ神樣、私どもが此上あの方に禮でも缺いたとして御覽なさいませ！　ですが、私どもは決して惡い事なぞ致したことは御座りませぬ……奥樣や御孃樣のお召物に就きましても、何一つ私どもは盾突いたことなぞ御座りませぬ。ですが、あの人はそんな事なぞ何とも思つちや呉れませぬ！　あゝ、あゝ、あの人は店へ參りまして、何でも手當り放題に持つて行くので御座いますよ。小布でも見懸けますと、『へゝへ、綺麗な布片だな――一寸自家へ持つて來て呉れ！』なぞと申しましてな。はい、左樣致しますと、五十ヤール以上の反物を捲き上げられて仕舞ふので御座りますよ。

クレスタコフ　うむ、そりやア驚いたな！　彼奴は、ぢやア本當に泥棒だ。

商人の一人　あゝ神樣、誰もあのやうな惡い知事を見たものは御座りますまい。彼奴は店で見た物を一つ殘らず衣囊へ押込んで仕舞ひます。えゝ、極上の品は云ふ迄もないこと、全然お話に成らんやうな詰らぬ物迄も奪つて行くんですよ。乾李、それも最う六年も樽に入れたまゝ打捨つて置いて、番頭でも喰ふまいと思はれるやうなのを、何の衣囊にも一杯塞め込むんで御座いますぜ。彼奴の命名日に――其日は恰度聖アントニウス祭と一緒に成りますが――此町の者は皆出來るだけ澤山持つて行かねば成り

ませぬ。えゝ、最う彼奴にやァ全然要のないやうな物でも――そんな事は全然關はないのですな。彼奴は何でも皆奪つて仕舞はなけりや承知しないんですよ。又彼奴が申します所に據ると、聖オヌフリウスも矢張彼奴の名の保護神なんでしてな。私どもは如何することも出來ません！　ですから又聖オヌフリウス祭にも矢張お祝物を持つて參らなけりやァ成らないのですよ。

クレスタコフ　それぢや彼奴は、宛然惡漢だね。

商人の一人　あゝ、あゝ、あゝ、神樣！　で、それを爲せまいと致しますればな――一聯隊の兵隊をどし〳〵家の中へ連れ込みますよ。それを訴へて出やうものなら、其者に門前拂ひを呉れましてな、『俺は貴樣を拷問も折檻もさせるんでない』つて申すんですよ。『そりやァ法律で禁じてあるからだ。だが、此後を氣を附けて居ろ、隨分俺のために蝮蛇を呑まされることがあるだらうからね……』

クレスタコフ　何と云ふ惡漢だらうね！　如何しても西伯利亞へ送らなけりや不可んよ。

商人の一人　貴方樣の御慈悲を持ちまして、彼奴を此處から追ひ出すことが出來さへしますりや――えゝ、最う遠い處でなくとも宜しう御座ります――それで最う萬事好く成るだらうと思ひますよ。私どもの麵麭と鹽を蔑視まないで下さいませ、（註曰、客を饗す時の挨拶の言葉。）旦那樣――私どもは此砂糖塊と此酒籃を御機嫌伺ひ迄に差上げまするで御座ります。

クレスタコフ　いや、そんな事をして呉れちや困るよ、俺は決して賄賂は取らないからね。が、俺に三百留布だけ借して呉れる氣があるなら――そりやァ全然別問題だらうがね！　併し砂糖や酒は受ける譯に行かないぞ。

商人一同（金子を出して。）何卒これをお取り下さいませ、旦那樣、何卒お取り下さいませ！　三百留布が何で御座いませう?!　まァ何卒切めて五百留布だけ取つて下さいませ……私どもをお助け下さる思召さへありや！

クレスタコフ　それ程お前達が言ふんなら……こりやァ借りて置くんだよ……まァ何に

も言ふまい……取つて置くよ。

商人一同（銀の盆の上に金を載せて、それを相手に捧げる。）何卒、盆ごとお取り下さいませ。

クレスタコフ　ちやアそれも貰つて置かうか。

商人一同（お叩頭をして。）さア何卒此砂糖塊も取つて下さりませ。

クレスタコフ　いや、いや、賄賂は如何しても受取らんぞ……。

ォーシップ　いや、旦那樣、何故取らないんですね？　遠慮なく戴いて置きなさいな！　皆途中で役に立ちますせ。砂糖塊と酒の壜とは私に遣つて下さい！　まア何でも此處へお出しなさい！　屹度役に立ちますよ……何です、そりやア？　縄ですか？　さア其縄も下さい！　旅行中に縄がありや、時々都合の好いことがありますよ。馬車が何處かで壞れたとしても、これさへありやア一時結ひ着けてでも置けますからね。

商人一同　閣下、何卒私どもにお惠みを垂れて下さりませ！　旦那樣に見離されたら、私どもは明日から如何成るか解りません。えゝ、最う其時こそ首を縊るばかりで御座りますよ。

クレスタコフ　まア可いから俺に信頼して居れ。出來るだけ骨折つて遣るつもりだからね。（商人一同去る。）

女の聲（舞臺裏から。）いゝえ、お前さんは私の邪魔なんかしないが可いよ。私はあの方の許へ伺つてお前さんのことも訴へて上げるからね！　まア酷いことをするね、私を突き飛ばすなんて！

クレスタコフ　如何したんだ？（窓へ歩み寄る。）お前方は如何したと云ふんだね？。

二人の女の聲　お助けて下さいませ、旦那樣。お裁判を願ひます、旦那樣！　暫時お耳を借して下さいませ！

クレスタコフ（窓を覗いて。）這入つて來るが可いよ。

第十一場

ク・レスタコフ。錠前屋の女房。下士官の寡婦。

錠前屋の女房（跪きながら。）お慈悲をお願ひ致します！

下士官の寡婦（同じく跪きながら。）お慈悲をお願ひ致します！

クレスタコフ　お前方は何者だ？

下士官の寡婦　私はイワノフと申す下士官の後家に御座ります。

錠前屋の女房　私は此土地の錠前屋の女房で、フェプローニャ・ペトローヴナ・バシュリョーピンと申す者に御座ります、旦那様……

クレスタコフ　まア待て。そして、一人づゝ順々に話すが可い。お前は如何して貰ひたいと云ふのだ？

錠前屋の女房　お慈悲に御座ります。何卒知事奴に復讐して遣つて下さりませ、天に在ます神様も知事奴に有りと有らゆる災難を送つて下さりませ――えゝ、彼奴一人でない、彼奴の子供達を始めとして、伯父や伯母が御座いましたら其奴等に到るまで――つまり知事奴の親類と云ふ親類に災難を送つて下さりませ！

クレスタコフ　知事は一體何んな悪い事をしたのだ？

錠前屋の女房　知事奴は良人の額を剃らせて、兵隊にしようと致しました――それで私どもはそんな闘に當つて居ないので御座いますよ。おゝ、彼奴は左様云ふ悪人で御座いますよ。そんな事は法律でも禁じてある相ぢや御座りませぬか。だつて、良人は結婚して居りますものね！

クレスタコフ　如何してそんな事が出來るだらうね？

錠前屋の女房　でも、確に知事奴が致しました、あの悪黨奴！　あゝ神様、現世か來世で屹と知事奴に罰を當てゝ下さりませ！　又彼奴に叔母が御座いましたら、其叔母御にも世の中のあらゆる災難が降り懸りますやうに！　又親爺が未だ壯健で居りました

ら、そんな奴は八ッ裂にされるか絞め殺されても構はない、本當にあの泥棒奴！　圖は裁縫師の息子に當つたんで御座いますよ。其又息子と云ふ奴がひどい酔漢で御座いましてね。ですが、親御の方から知事に賄賂を送りましたので、知事奴は商賈のバンテレーエフの息子を引張り出さうと致しました。處が、其のバンテレーエフの方でも主婦さんに小布を三つ持たせて遣りました――ですから、知事奴は到頭私許へ押懸けて參つたので御座いますよ――『貴樣は一體亭主を何にするんだ？　あんな奴貴樣にや何の用もないんだらう』と申しましてね――左樣さ、そりやァ私も好く知つて居りますよ――ですが、亭主が私に入用でなくのも、そりやァ此方の事ぢや御座いませんか。そんな惡黨なんですよ、彼奴は！――『貴樣の亭主は泥棒だ！』と、知事奴が申します。『今迄は未だ泥棒をしないにしろ――そんな事は如何でも可い、彼奴は屹と將來に泥棒でもするだらう。左樣すりやァ來年は何うせ新兵にされるんだ』つて――それぢやァ私は如何しても亭主なしで居なくちや成らないんですか？　それ、左樣いふ惡黨で御座いますよ。へえ、私やァ飽く迄知事奴の一族を盲目にして遣りたいので御座ります。左樣したら、其奴等も最う神樣の土地を見ることが出來ますまい。で、若し知事奴に祖母樣がありましたら、其の祖母樣も……

クレスタコフ　最う可い、可い！（他の女に。）で、お前は？

錠前屋の女房（退場しながら。）私の申したことをお忘れ下さいますな、旦那樣！　何卒憐愍を懸けて下さいませ！

下士官の寡婦　私が參じましたのは、旦那樣、あの知事を……

クレスタコフ　うむ、あの知事がお前に何んな事をしたのだ？　掻い摘んで申せ！

下士官の寡婦　彼奴が私を毆らせたので御座いますよ、旦那樣、私を毆らせたので御座いますよ。

クレスタコフ　如何したんだつて！　彼奴が……

下士官の寡婦　間違ひからですよ、旦那樣。私等女どもが市場で喧嘩をして居ました處

へ、巡査が少し遲れて參りましてね、私を捕まへて行つて酷い目に遭はせたんで御座います。私やお蔭で二日も坐ることが出來ませんでしたよ。

クレスタコフ　それで今如何しようてんだ？

下士官の寡婦　勿論、如何することも出來ませんがね。ですが、間違ひでそんな目に遭つたんだから、幾許か罰金を拂はせることは出來ませう。恰度今幾許かの金子に成れば、私やア非常に助かるんですからね。

クレスタコフ　可し、可矣。まア歸つて居るが可い。俺が好いやうに裁いて遣るよ。（窓の中へ哀願狀を持つた手が現れる。）未だ終局に成らないのか。（クレスタコフ自から窓から首を出す。）いや、いや、お前なぞに關つて居られない――駄目だ、駄目だ！（再び窓から遠ざかる。）隨分長く引摺られたもんだ、其奴等ア惡魔にでも喰はれッちやえ！　オーシップ誰も最う入れるな！。

オーシップ　（窓に近づきて叫ぶ。）去け、去け、旦那は最う少しもお暇がないんだ、明日また來い！（扉が開く。廣い粗羅紗の外套を著て、長い鬚と、脹んだ唇と、窶れた頬とを持つた男の姿が見える。其の背後になほ二三の他の姿も見える。）

オーシップ　出ろ、出ろ！　何をお前達は此處に愚圖々々してるんだ？（彼は手を最初の男の腹に當てゝ、控の間に押し戻す。扉はオーシップト哀願者の後ろに閉ぢられる。）

第十二場

クレスタコフ。マリヤ・アントノヴナ。

マリヤ　あら！

クレスタコフ　何故そんなに驚くのです、お嬢さん？

マリヤ　いえ、決して驚きは致しませんよ。

クレスタコフ（誘惑するやうに。）御免なさい、お嬢さん。けれど私やア非常に愉快な

んですよ、貴方が私を何する男と思つて下さつたのは……で、失禮ですが、貴方は何處へ行きたいと思つて被坐しやるの？

マリヤ　私何處へも行きたいと思つてやしませんわ。

クレスタコフ　如何して？　少し可訝しう御座んすね、何處へも行きたいと思はないなぞと云ふのは。

マリヤ　只、此處へ母が參つて居たやうに思ひましたから……

クレスタコフ　いや、私や飽く迄伺ひたいのです、如何してそんな事を仰有つたのか、何處へも行きたいと思はないなぞと。

マリヤ　何だかお邪魔を致して居るやうですね、貴方は非常に重大な事務を取扱つて被坐しつたでせう。

クレスタコフ（誘惑的に。）貴方の其の美しいお眼に較べては、何だつて重大なものはありませんよ……決して貴方が邪魔に成ると云ふやうなことはない。それどころか、貴方は私に幸福を齎して下さいますよ。

マリヤ　本當に貴方は都のお方のやうに物を仰有いますわね……

クレスタコフ　そりや最う斯んな美しい貴婦人と談話をするんですもの。私は貴方に椅子をお勸めする光榮を有しても宜しう御座いませうか。いや、飛んだ失禮を申しましたな！　貴方は椅子には適しません、却つて玉座に！

マリヤ　實際、如何したら可いでせう……私、斯うしては居られないので御座いますよ。（椅子に着く。）

クレスタコフ　まア綺麗な半帛を持つて被坐しやいますねえ！

マリヤ　惡い方！　そんなに田舍娘をお嬲りなさるもんぢや御座いませんよ。

クレスタコフ　あゝ、お嬢さん私やア貴方の其の小さい半帛に成つて、一度其の百合のやうな頸に卷かれて見たいですよ。

マリヤ　あゝ、最う私にや何にも解りませんよ、貴方の仰有つてることは……此の半

帛……今日はまア好い春日和で御座いますことね！

クレスタコフ　何んな春だつて、お嬢さん、貴方の其の薔薇の唇と比べることは出來ませんよ。

マリヤ　まア、本當に貴方はお口がお上手ね！……貴方にお願ひしようと思つてたんですがね、二三行で可いからアルバムに詩を書いて下さいませんか。何れ貴方は澤山知つて被坐しやるんでせう。

クレスタコフ　貴方のお氣に召すことなら、私ア何でも致しますよ。何卒仰有つて下さい——何んな詩をお望みですか。

マリヤ　何んな詩でも構ひませんが——只綺麗な新しいのをね。

クレスタコフ　斯うッと、詩！　そんな物なら幾許でも知つて居ますよ。

マリヤ　で、何んな詩をアルバムに書いて下さいますの、一寸聞かせて下さいましな。

クレスタコフ　唄つて見る迄もない、私はちゃんと心におぼえてますよ。

マリヤ　あゝ、私も本當に詩が所好なんですわ！……

クレスタコフ　左樣、私やア何んな詩でも非常に澤山知つてますよ……まア例へば、斯んなのをアルバムに書いて上げませうか。

お前、お前こそ戀の悶えに捕はれて、
無益に神を恨むのよ……でなきや、それに似たものでも……一寸旨く想ひ出せませんね。だが、そりやアまア如何でも可い。そんな詩の代りに、私の心を差上げたいと思ひますよ。貴方を始めて見た瞬間から……（椅手を持つて近づく。）私の心は戀に燃えて……

マリヤ　あゝ、戀に燃え……！　そりやア何ですか、私には少しも解りませんよ、戀……戀、そんな事、私は未だ一度も聞いたことが御座いません……（椅子を持つて、後に退る。）

クレスタコフ　何故そんなに椅子を持つて退るんです？　二人一緒に坐つて居た方が、

ずつと愉快ですよ。

マリヤ（退りながら。）何故そんなに近づいて被入しやるの？　離れて坐つて居ても同じ事ですよ。

クレスタコフ（だん〳〵近づいて。）何故離れるんです？　一緒に坐つて居たつて同じ事ぢやありませんか。

マリヤ（退りながら。）何故左樣なんですよ？

クレスタコフ（ます〳〵近づく。）一緒に緊着いて居るやうに、貴方に見えるばかりですよ。私は最うずつと遠ざかつて居るんだと想つて居て下さい……あゝ、お嬢さん、貴方を此兩腕に抱き締めることが出來たら、私や何んなに幸福でせうね！

マリヤ（窓の方を見ながら。）あら、何でせうね、窓の外を飛んで行つたのは？　鵲でせうか、それとも他の鳥でせうか。

クレスタコフ（肩に接吻して、それから窓の方を見る。）ありやア鵲ですよ。

マリヤ（不機嫌に立ち上る。）いゝえ、そりやア餘まりです　隨分失禮ね……

クレスタコフ（女を引停めながら。）御免なさい、お嬢さん！　そりや戀故ですよ。戀が私を迷はせて、あんな事をさせたのです、本當に戀は……

マリヤ　貴方は私を田舍娘と思つて被坐して、そんな……（振離さうとして、身を藻掻く。）

クレスタコフ（なほ女を引停めながら。）そりやア戀の仕業ですよ、眞個戀の……私やたゞ戯談をしたんですよ、マリヤさん。そんなに憤らないで下さい！　私やア膝を突いてお寛恕を願ひますよ。（跪く）。御免なさい、御免なさい！　ねえ貴方、私は膝を突いて居ますよ……

第十三場

前場の人々。アンナ・アンドレエヴナ。

檢察官

アンナ（クレスタコフの跪けるを見て。）あら、如何なすつたんで御座います！

クレスタコフ（立ち上る、傍白。）餘計な奴が來やァがつたな！

アンナ（娘に。）一體こりやァ如何した譯だい、マリヤ？　お前の態度はそりや何だよ！

マリヤ　だつて、阿母さま、私は……

アンナ　彼方へお出で！　お出でッたらお出でよ、直に！　で、二度と私の目の前へ出て來るんぢやァないよ。（マリヤ泣きながら去る。）まァ御免なさいまし。ですが、私も本當に吃驚しましたよ……

クレスタコフ（傍白。）成程、此女も未だ却々美味さうだな――隨分惡くないね！　身を投げるやうに跪く。）ねえ、奥さん、私やァ戀のために死んで仕舞ひさうですよ。

アンナ　まァ、そんな處に跪いて！　何卒お立ち下さい、お立ち下さいまし、此牀は綺麗ぢやありませんよ。

クレスタコフ　いゝえ、跪いて、跪いて居たいのですよ。私は貴方に伺はなけりや成らない、何んな運命が私の上に懸つて居ませう――生ですか、死ですか！

アンナ　ですか、御免なさいませ、私にやァ未だ貴方のお言葉の意味が能く解らないのですよ。貴方はたッた今自宅の娘に心を打開けて被坐したんでせう……

クレスタコフ　いゝえ、貴方が私の戀の相手なんですよ。私の生命は今やたゞ一筋の髪の毛に懸つて居るんです。貴方が私の眞の戀を受け容れて下さらなきや、私は最う此後此世に生きて居る甲斐はない！　私の胸には焔が燃え立つて、貴方のお手を乞うて居りますよ。

アンナ　ですが、私は何で御座いますよ、まァ言はゞ……結婚した身なんですよ。

クレスタコフ　そんな事は如何でも可いぢやありませんか！　戀にそんな見界はない！

カラムジン（註曰、露西亞の大歴史家）も斯う申しましたよ、『法律はたゞ罪するばかりだ……』小川の蔭へ身を遁れませう……お手、何卒お手を取らして下さい。

第十四場

前場の人々。　マリヤ・アントノヴナ、不意に駈け込んで來る。

マリヤ　阿母さま、阿父樣が仰有いましたよ、貴方は……（クレスタコフの跪いて居るのを見て叫ぶ。）あら、如何したんですね！

アンナ　まア、如何して、何が何だい、お前は如何しようてんだい？　何と云ふ厚顏しい兒だらうね、此女は！　突然此部屋へ跳り込んで來たりしてさ、宛然火の點いた猫みたいだよ！　さア、何がそんなに吃驚するやうなことがあるんだよ？　何故そんなに魂銷るやうな聲を出すんだい？　本當に他人樣がお思ひに成るよ、お前は未だ三歳に成る子供かも知れないつて！　本當に、今年十八に成る娘だとは如何したつて思はれないよ。何時お前は分別が附いて、躾の好い令嬢のやうに振舞へるんだい……何時お前は習得えるんだよ、好い行儀だの嚴しい作法だのをさ！

マリヤ（泣きながら。）本當に阿母さま、私知らなかつたんですよ……

アンナ　お前の頭には始終何だか解らない霧が懸つてるんだよ。何でも地方判事のお孃さんの眞似ばかりしてお坐だがね、何でお前はあんな方の作法を倣ふんだい？　お前が眞似をするにや、他に好い模範が幾許もあるぢやアないかね――目の前に居るお前の阿母さまにしてからがさ。それが模範です、それを標準にしなければ不可ないんですよ。

クレスタコフ（マリヤの手を握つて。）アンナ・アンドレエヴナさん、二人の幸福の邪魔をしないで下さいな！　二人の眞の戀に祝福を與へて下さいよ。

アンナ（驚く。）えゝッ、それぢや貴方は此子を……

クレスタコフ　貴方から決斷を與へて下さいな！　生ですか、死ですか！

アンナ（氣を取直して、マリヤに向ひ。）それ御覽よ、馬鹿だねえ、此女は！　何て可笑しな樣子をしてるんだらう。高貴のお客樣がお前のために跪いて下さるんだよ。

それにお前は――お前は突然狂女のやうに逃げ出してさ！　眞個、お前は私からお斷りした方が可い位の女だよ――お前なぞにやア勿體なさ過ぎるんだからね。

マリヤ・私やア最う決してあんな眞似は致しませんよ、阿母さま、此先二度とあんな眞似は致しませんよ。

第十五場

前場の人々。知事、すつかり息を切らしながら。

知事　私やア最う二度と致しませんよ、閣下！　私を不幸にしないで下さい、私を不幸にしないで下さい！

クレスタコフ　如何したッてんですね、一體？

知事　商賈どもが此處へ參つて貴方に訴へましたでせう、閣下。私の名譽に懸けて貴方の前に誓ひます、彼奴等の言つたことの半分は嘘ですよ。彼奴等こそ人民を欺いて金子を捲き上げるんですからね。下士官の寡婦が來て、私が毆らせたやうに申上げたら、それも嘘を吐いたのです――嘘です、神に誓つて、そりやア嘘ですよ！　彼奴が自分で自分を毆つたんですよ！

クレスタコフ　下士官の寡婦を惡魔に喰はせろ！――あんな奴のことは最う構つて遣らないからね。

知事　彼奴等の言ふことを取上げて下さいますな、決して取上げて下さいますな！あれは皆下劣な嘘吐きどもですよ。又彼奴等が嘘吐だつてことは町中に知れ渡つてるんで御座いますよ。あの鬼婆のことに就きましては、私は敢て斷言いたしまするが、ありやア鬼婆ですよ、あんなのは二人と此世に御座いませんでせうな！

アンナ　ねえ貴方、何んな名譽をイワン・アレキサンドロヴィッチ樣が私どもにお許し下されたか、御存じですか。あの方は娘の手をお求め下さいましたよ。

知事　なに、なに！……お前は氣が狂つてるんだよ。えゝ、閣下、何卒彼女の言葉を

お氣に觸れないで下さいまし。彼女は折々頭が變に成る質で御座いますから！……何うも母親の遺傳がありましてな。

クレスタコフ　あゝ、私は本當にお嬢さんの手を求めたのです。心から愛して居るんですよ。

知事　何と仰有います、閣下！

アンナ　だつて、彼樣仰有つてるんぢやありませんか……

クレスタコフ　私は心から眞面目で言つてるんです！……眞個狂人のやうに成つて居るんですよ。

知事　何うも眞實には出來ませんね、私はそれ程偉大な名譽を受ける價値がないんですからね！

クレスタコフ　實際、貴方が娘の手を與へることを拒絶されたら、私やァ何をするか解りませんよ。

知事　いや、何うも眞實には出來ませんな、閣下。御戯談でせう！

アンナ　あゝッ、貴方の沒分曉漢には困つたものですね！一體私は幾度繰り返さなけりやァ成らないんでせう！……

知事　何うも眞實には出來ませんな！……

クレスタコフ　私に下さい、お嬢さんを私に下さい——私やァ眞個絶望して居るんです、何んな事でもし兼ねませんよ……私が彈丸で頭を貫いたら、貴方は法律上の責任を受けなけりや成りませんよ。

知事　あゝ神樣、私にやァ罪はないんですよ、精神的にも肉體的にも！　私どもを怒らないで下さい、閣下！　何卒閣下のお心任せになすつて下さいませ！……何うも頭腦がふら〳〵して……如何いふ事に成つたんだか能く解らないのですよ。眞個馬鹿に成つて仕舞ひました、斯んな事は從來ありませんでしたがね。

アンナ　最う好いから、二人に祝福を與へて遣つて下さい！（クレスタコフはマリヤ

の手を執つて首を下げる。）

知事　神は汝等を祝福す――だが、私は此事にやア無責任ですよ。（クレスタコフはマリヤに接吻す、知事はそれを凝視する。）をや、をや〳〵、二人は本當に……！（眼を擦る。）左樣だ、左樣だ、二人は接吻したぞ！　本當に接吻したぞ！　すつかり花婿と花嫁のやうに！　あゝ、おゝ、何と云ふ幸福なことだい！　可矣、俺は承知したぞ！

第十六場

前場の人々。オーシップ。

オーシップ　馬の支度が出來ましたよ。

クレスタコフ　可矣！……直ぐ行くよ。

知事　貴方は未だ旅行をなさらうと云ふのですか？

クレスタコフ　あゝ。

知事　では、一體何時？……私の考へが間違つて居ませんでしたら、何時結婚なさらうと云ふ思召で……

クレスタコフ　直ぐ又戻つて來ますよ……たツた一日だけ叔父の許へ行つて來るんです――そりやア馬鹿に金持の老人でしてね……明日の朝は又此處へ參りますよ。

知事　左樣いふ譯なら、強ひてお止め申しますまい――只餘り遲く成らない間にお歸宅をお待ち申しましよ。

クレスタコフ　いや最う、直きに歸つて來ますよ。（マリヤに向つて）。左樣なら、私の可愛いゝ女……いや、何んなに深く貴方を思つて居るか、私やア言葉に盡されないんですよ……左樣なら、私の山鳩さん！（手に接吻す。）

知事　で、貴方は何も旅行に事缺くものは御座いませんか。貴方は、何で御座いましたね、幾許かお金子に不足して被坐しやりやしませんか。

クレスタコフ　あゝいや、決してそんな事は……（又思ひ返して。）だが……左樣ですね、

貴方に其氣があつたら……

知事　何れだけ御入用で御座います？

クレスタコフ　貴方には此前三百留布拜借しましたね。あゝ、詳しく云へば四百留布でした！――貴方の間違ひを利用するんぢやありませんよ……まア、それで宜しい、又恰度それだけ借して下さいな、左樣すると　悉皆で八百に成りますね。

知事　では、直に差上げませう！（紙入から金子を取出す。）何卒恰度新しい銀行紙幣が御座いましたよ。

クレスタコフ　成程！（銀行紙幣を取つて眺める。）益々好いですな！　新しい銀行紙幣は新しい幸福を意味すると云ひますからね。

知事　眞個、眞個――新しい幸福を！

クレスタコフ　左樣なら、アントン・アントノヴィッチさん！　私は貴方の厚遇に對して非常に感謝して居ますよ。何處でも私はこれ程素張しい歓待を受けたことはない。左樣なら、アンナ・アンドレエヴナさん、左樣なら、私の小鳩さん！

舞臺の裏

クレスタコフの聲　左樣なら、私の心の天使さん！

知事の聲　をや、貴方は郵便馬車で旅を爲さるんですね！

クレスタコフの聲　左樣、私やアそれに慣れて居ますからね。彈機附の馬車はたゞ頭痛を起させるぐらゐなものですよ。

馭者の聲　どう、どう、どう。

知事の聲　ぢやア切めて何か下にお敷き下さい……絨氈のやうな物でも……如何でせう、絨氈を車の中へ持ち込ませては？

クレスタコフの聲　いや、いや、それに及びませんよ……だが、強つてと言はれるなら、持ち込ませて下さつても好う御座んす……

知事の聲　おい、オイドキシャ！　一寸急いで道具部屋へ駈けて行つて、一番好い絨氈を持つて來い――波斯製の青い地のだよ。早く、早く！

馭者の聲　どう、どう、どう！

知事の聲　では、何日頃お待ち申したら宜しう御座いませうか。

クレスタコフの聲　明日――遲くも明後日は歸りますよ。

オーシップの聲　あゝ、絨氈が來ましたね！　此方へ下さい、其中へ置くんだよ……宜しい、それから藁を一と掴み！

馭者の聲　どう、どう、どう！

オーシップの聲　此方へ、此方へ！　最少し！……左樣、それで可い！（手で絨氈を叩く音、）さア、旦那、何卒席に掛けて下さい。

クレスタコフの聲　お機嫌よう、アントン・アントノヴィッチさん！

知事の聲　御機嫌よう、閣下！

女の聲　御機嫌よう、イワン・アレキサンドロヴィッチさん！

クレスタコフの聲　御機嫌よう、阿母さま、御機嫌よう、小さな山鳩さん！

馭者の聲　さア行けッ、はい、はい、好い馬だな！（郵便馬車の鈴が鳴る、幕が降りる。）

第五幕

同じ部屋。

第一場

知事。アンナ・アンドレエヴヤ。マリヤ・アントノヴナ。

知事　おい、アンナ、お前も斯んな事に成らうとは思はなかつたらうね？　思ひも寄らぬ幸運が湧いて來たもんだ！　さア正直にお言ひ、お前は斯んな事に成らうとは夢にも思つて居なかつたらう？……昨日は未だ詰らない知事の細君だつたんだよ――處が、不意に……まア何と云ふ出世だらうな！　お言ひよ、まア如何いふ惡魔の生んだ娘だい、お前は全體？

アンナ　何にも驚くことはありませんよ。私やア最うずつと前から斯んな事があるだらうと思つてましたからね……貴方はまアこれを奇蹟のやうに思つてるんですね、それと云ふのも、貴方が馬鹿正直な性質なんだからですよ、本當の貴族と云ふものを見たことがないからですよ。

知事　俺自身が貴族でないやうな口振だね！いや、實際、アンナ考へて見ると嬉しいな。何んな一番の鳥に俺達も不意に成つたんだい――左樣、左樣、アンナ、高い處を飛ぶ鳥だぜ、畜生、耐らないな！……あゝ、左樣だ、俺はこれからあの惡漢どもを、哀願狀や密告狀を持つて來た奴等を、一人殘らず覿面に虐め附けて遣るんだ！……おい、誰か居ないか。（巡査現はる。）あゝ、お前か、イワン・カルポヴィッチ君！　直に行つてね、一寸商人樣方を連れて來て呉れい……ヘッ、俺は彼奴等に思ひ知らせて遣るよ、あの泥棒どもに。俺を訴へるとは何事だ！　あんな呪はれた猶太どもを見た者はあるまい？　まア見て居れ、畜生奴等！　從來お前方はたゞ蟾蜍を呑んでりやア可かつたんだが、今日からは蝮蛇を呑まなけりや成るまいよ。俺は彼奴等を悉皆書き

附けて遣るんだ、あの告訴人どもを……又あの代書人ども……お前方が彼奴等に告訴狀を書いて遣つたんだな——お前方も俺は忘れんぞ……彼奴等全體に思ひ知らせて呉れるんだ。左樣すりやア、……神樣が何んな幸福を知事の家へ與へて下さつたかつてことも解るだらうよ。俺樣はな、娘を見當り次第の男に呉れたんぢやアない、世界中に比較物もないやうな男に呉れて遣つたんだぞ。其人は何んな事でも心の儘に出來るんだ、何んな事でも、何んな事でも！　それを親類中に知らせるが可い。それを世界中の人の耳へ叫喚いて遣れ、鐘を鳴らして遣れ。眞個耐へられないな、これが俺の勝利の日なんだ、俺は凱旋式が擧げたいよ。(巡査去る。)ヘッ、アンナ、まア如何決めるんだい？　俺達や此先何處で暮したもんだらうな——此處か、都か。

アンナ　都ですとも。そりやア解り切つてるぢやありませんか！　私達のやうな者が如何して斯んな土地に何時迄も住んで居られるもんですか！

知事　うむ、可矣、それぢやア都だ！　だが、此土地に居るものも惡かアないね。お前は如何思ふね、俺は都へ行くと知事と云ふ職を捨てゝ仕舞はなけりやア成らないよ——えゝ、アンナ？。

アンナ　解り切つてるぢやありませんか！　知事が何ですよ。

知事　ねえ、アンナ、斯う成りや俺達も忽ち顯官の仲間に這入り込むだらうね？　あの方は大臣と云ふ大臣と君僕で話の出來る地位にあると云ふんだよ。そして、宮中へも出入するんだよ。あの方は屹度俺の昇進のことも、心配して呉れるだらう。俺も早く將軍の肩章を著けたいものだな。如何だい、アンナ——俺は實際將軍に適して居るだらうかね。

アンナ　えゝ、適して居ますとも！

知事　あゝ、耐へられないな！　俺が將軍に成つて肩章を着けたら、嘸立派に見えるだらうな！　で、アンナや、何んな肩章が一番好いだらうな、赤か青か。

アンナ　勿論青ですよ。

知事　へッ、へッ、まアお前は本當に青が所好だねえ！　だが、赤だつて惡かアないよ。何故將軍がそんなに好いもんだか、お前知つてるかい。そりやア斯う云ふ譯さ……例へば何處かへ旅行に出るとするね――飛脚や傳令が先乘をして、馬だ、馬だ、將軍だと叫喚きながら駈けて行く……で、停車場で馬が間に合はない時なぞは、何んな人でも待つて居なくちや成らないのに――小官吏どもゝ、主立つた人々も、知事なぞも――將軍樣だけはそんな事に頓着しないで、ゆつたり構へて居られるんだよ。將軍は又何處か監督の許で飯を喰ふんだね。すると、其處へ知事が御機嫌伺ひに出るんだよ。は、は、は、はア。（涙が頰を傳つて轉び落ちる程笑ふ。）眞個、申分のない、立派な生活だアね。

アンナ　貴方は武骨な荒ッぽい事ばかり所好なんですね。これから後は貴方も生活振を變へなければ不可ませんよ。だつて、あんな友人とは――例へば大好きの地方判事、あの人と一緒に成つて貴方も獵をして歩きますね――あの人やジェミリヤニカなんかとは、これから先絶交しなけりや不可ませんよ。いえ、これからは貴方も上流社會にお友達を拵へなけりや不可ませんよ、伯爵や其他世界的人物を……たゞ私はね、腹藏なく言へば、一寸貴方が心配に成るんですよ。時々貴方は口を滑らせて、上流社會ぢや決して聞くことの出來ないやうな言葉をつい言つて仕舞ふんだものね――

知事　うむ、それが如何したッてんだ――言葉遣ひなぞは如何でも可いよ。

アンナ　えゝ、貴方がたゞ知事で居るとすりやアね……ですが、彼處ぢや……又生活が一變するんですよ。

知事　左樣とも、左樣とも！　彼處ぢや肴も二種類はなくちや成らんね――諸子鰷と香魚――そりやア非常に綺麗な魚だよ。一寸それを見ただけでも、最う口が唾で一杯に成るんだぜ。

アンナ　此人は何時でも魚のことばかり考へて居るんだよ！　それに反して、私やア最う自家が都の一流に成るッてことより外に、何にも希望はない。私の部屋は始終白

檀の香で一杯に成つて居るんだよ、だから人が這入つて來ると直ぐ眼を閉いで……（眼を閉ぢ、強く息を吸ひ込む。）あゝッ、何て好い香でせう！

第二場

前場の人々。商人ども。

知事　あゝ、好く來たね、私の眞實なお友達！

商人一同（お叩頭をして。）一同貴方の健康を祝します。

知事　あゝ、旦那樣。皆さん、近頃御機嫌は如何だね？　それに商賣は何んな景氣かな？　處で、鑄掛屋と行商人とは哀願狀を差出したんだね！　此泥棒、原始時代の惡獸、嘘吐きの鰻野郎奴――うむ、お前達が告訴狀を差出したんだな！　何を自惚れてそんな眞似をしたんだい？　大方お前達は俺を牢舍へ打込んで仕舞へる位に考へて居たんだらう？……で、お前達や知つてるのか、皆樣方――七人の惡魔と一人の魔女がお前達の咽喉を絞め着けるぞ！――お前達や知つてるのかよ……

アンナ　あゝ神樣、アントンさん、何と云ふ言葉を使ふんですね！

知事（不機嫌に。）なに、言葉だつて――そんな事が考へてられるかい！（商人どもに。）お前達は知つてるのか、あの貴い顯官は、お前達が苦情を持ち込んだ彼の方は、俺の娘と結婚されるんだぞ！　さア魂銷たらう？　へッ、今度は俺がお前達を訴へて遣るよ……お前達は有らゆる方面から泥棒をして居るのだ！　例へば、お前が政府と納附契約をして、腐れた布で旨く其眼を胡魔化して十萬留布せしめたとして見ろ。そして、其際俺の許へ十二ャールだけ奉納したとすると、お前は最う人に恩を著せた心算に成つてるんだ！……左樣だ、それが知れたら、お前はたゞ置かれまい……が、お前が一寸腹を肥したにしろ、元々商人なんだから、一々攻擊する譯には行かないよ。商人だつて、何も貴族に劣つた所はないとお前は言ふだらうな！　おい、猿ッ、お前は知つてるか、貴族つて何んなものだか！　貴族は苟も敎育を受けて居るんだぞ……成

程、貴族だつて學校ぢやア毆られようさ、又それで好いんだ、さもなけりや何一つ勉強しないだらうからね――だが、お前達はな!!　お前達の敎育は先づ泥棒を敎へる事から始まるんだぞ！　お前の主人はお前を毆つて、本當に詐欺の藝當を敎へ込むんだぞ！　最う丁稚の間から、未だ天に坐ます吾等が父よを習得ない間から、秤に鼻彈きを吳れる術は習得て居るんだ。それでお前の腹が膨れて、そろ〳〵財布が重たく成ると、商賈の癖に大風な顏をしたがる奴さ！……で、お前は、お前は何と云ふ妙な獸だい！　毎日十六の釜を鑄りやア、最うそれで高慢な面をして偉相に振舞やアがるんだ！　えゝ、俺はお前の高慢ちきな面に唾を吐き懸けて遣らア！

商人一同（跪いて身を屈めながら、）お助け下さい、お助け下さい！　はい、私どもが惡いので御座います！

知事　何と思つて哀訴狀なぞ差出したんだ！　加之、お前が橋を架けて、百留布も懸らぬ材木を二千留市だと勘定書に附けて來た時、誰が眼を瞑つて遣つたと思つてるんだ！　俺だぞ、お前を窮厄から救つて遣つたのは――此の山羊鬚の巨頭奴！　お前はそれを最う忘れたのか。俺が一語でも貴樣の身の上に就いて饒舌つたら、お前は西伯利亞行の外なからうぜ。それを何と心得てるんだ？

商人の一人　私どもが惡いので御座います、惡魔が私どもを誘惑したのですよ。ですが、私どもゝこれから最う決して苦情は申しませぬ。何んな物を上げたらお心を直して下さいませうか、何卒仰有つて下さいませ――最うお腹立ちに成ることだけは止めて下さいませ！

知事　最う腹を立てるな！　それぢやア今俺の前を手を突いたまゝ匐つて通れ！　何故だ？　そりやア今俺が權力を握つて居るからさ。俺が若しお前の地位にあつて、お前が俺の地位にあつたとしたら、犬ども奴、お前は俺を糞溜の中へ突き落して、お負けに上から石小突にも仕兼ないだらうからね。

商人一同（腹這ひに成りながら。）お助け下さい、お助け下さい、私達を破滅させない

で下さいませ、アントン・アントノヴィッチさま！

知事　お助け下さい、お助け下さいだ！　左樣、今こそお助け下さい、お助け下さいだが、一寸前迄は如何だつた……俺は一つお前達を……あゝ、いや！（手を振る。）神樣が宥して遣れと仰有るよ――最う可い！　俺は報讐は所嫌なんだよ。だが、好く覺えて置け、此後とも氣を附けるが可いぞ！　俺は娘を普通の貴族に嫁附けたんぢやないつてことを忘れるな……で、お前達も精々立派な祝物を持つて來るが可い、解つたか、燻鮭の一尾か砂糖の一塊で事が濟むなぞと考へるな！……では、最う許して遣るから歸れ！（商人一同去る。）

第三場

前場の人々。地方判事。病院監督。ラスタコーフスキ。

地方判事（室へ入る前に戸口のところで。）あの風聞は眞實なんですか、アントン・アントノヴィッチさん？　實際、非常な幸運が貴方に向いて來たと云ふのは？

病院監督　私は貴方に此の非常な幸運をお祝ひする光榮を有します。私はそれを聞いた時に心から喜びましたよ。（アンナ・アンドレエヴナに近づいて、手に接吻する。）アンナ・アンドレエヴナさん！（次にマリヤ・アントノヴナに近づいて、手に接吻する。）マリヤ・アントノヴナさん！。

ラスタコーフス　アントン・アントノヴィッチさん、私も亦祝辭を呈します！　神は貴方と新しい御夫婦とに長い生涯を贈つて、貴方に數多の孫や曾孫を贈つて下さりますことでせう！　アンナ・アンドレエヴナさん！　マリヤ・アントノヴナさん！（兩人の手に接吻する。）

第四場

前場の人々。カローブキン夫妻。リュリュコフ。

檢察官

カローブキン　私は貴方に私の祝詞を捧げます、アントン・アントノヴィッチさん！……アンナ・アンドレエヴナさん！……（母と娘との手に接吻する。）

カローブキン　心からの祝辭を此の新しい幸福に捧げます、アンナ・アンドレエヴナさん。

リュリュコフ　私は祝辭を述べる光榮を有します、アンナ・アンドレエヴナさん！（彼女に近づいて手に接吻し、次に觀客に向つて大膽に舌打をする。）マリヤ・アントノヴナさん、私は祝辭を述べる光榮を有します。（彼女の手に接吻し、次に同じ身振をして觀客に向く。）

第五場

前場の人々。ポプチンスキ。ドプチンスキ。多くの人々フロクコート、燕尾服を着けて現はれ、●巡繰りにアンナ・アンドレエヴナに近づいて、『アンナ・アンドレエヴナさん！』と言ひながら其手に接吻す。次に娘に近づいて、『マリヤ・アントノヴナさん！』と言ひながら接吻す。熱心の餘り我勝ちに其手に接吻せんとして、ポプチンスキとドプチンスキとは互に衝突す。

ポプチンスキ　私は祝辭を述べる光榮を有します……

ドプチンスキ　アントン・アントノヴィッチさん、私の心からの祝辭を……

ポプチンスキ　……非常な喜ばしい出來事に捧げます……

ドプチンスキ　アンナ・アンドレエヴナさん！

ポプチンスキ　アンナ・アンドレエヴナさん！（二人は同時に近づいて、彼女の手に接吻しようとして額合せをする。）

ドプチンスキ　マリヤ・アントノヴナさん！（其手に接吻する。）私は貴方に祝辭を述べる光榮を有します。貴方は結構な御身分に成つて、金襴の衣裳を着て歩かれ、さまざまな美味しい肉汁を召上つて、愉快に其日をお暮しなさるので御座いませうね……

ポプチンスキ（彼の言葉を遮つて。）マリヤ・アントノヴナさん、私は貴方に祝辭を捧げる光榮を有します！　神は貴方に有ると有らゆる富と、多くの金銀と、倔强の小さな男の兒とをお與へ下さいますやうに、斯んな……斯んな小さな……（手眞似で大きさを示す。）……掌に乘るぐらゐの……左樣、それで可笑しな風に『わう――わう――わう――』と叫ぶやうな男の兒を。

第六場

前場の人々。學校長夫妻。其他新しい客が部屋に入る。接吻は續けられる。

學校長　私は光榮を有します……

學校長の妻（アンナに抱き着いて。）心からの祝辭を捧げます、アンナ・アンドレエヴナさん！（接吻する。）あゝ、私はそれを聞いて何んなに喜んだでせう！　或人が私に告げて呉れたんですよ、『アンナ・アンドレエヴナさんがお孃さんをお嫁附けに成るんだつて。』――『あゝ神樣』と、私は一人で考へたんですよ。それで大層喜びましてね、良人に斯う言つたんですよ、『まアお聞きなさいよ、ルカさんや、今度アンナ・アンドレエヴナさんの許で起つたことは、誠にお目出度いぢやありませんか！……まア』と、私は一人で考へたんですよ、『神樣は有難いものだ。』それから又良人に言つたんですよ、『私やア最う氣がせか〳〵して、本當に死んで仕舞ひ相ですよ、一刻も早くアンナ・アンドレエヴナさんのお目に懸つて……あゝ、私の神樣』と、私は一人で考へて見たんですよ、『あの方は如何かして娘に好い配偶をと、平生念じて被坐したところへ持つて來て、旨く斯んな幸福が湧いて來たんだもの！……全くあの方が望んで被坐した通りなんだよー……私やア最う嬉しくて、嬉しくて、口にも言へないくらゐなんだよ……』私や泣いたんですよ、本當におい〳〵泣いたんですよ――ですから、ルカも不思議に思ひましてね、『一體、お前は如何して泣くんだい、ナスチェニカ？』つて訊くんですよ――『あら、ルカさんや』と、私は言つて遣りました、『私は自分でも解らな

いんですよ、涙が噴水からでも出るやうに無闇に流れるんだもの……』

知事　何卒、紳士淑女諸君、御自由にお掛け下さい。おい、ミーシュカ、椅子を持つて來い！（客は座に着く。）

第七場

前場の人々。警察署長。巡査一人。

警察署長　知事殿、私は貴方に祝辭を述べる光榮を有します。そして、貴方に長い生涯を望みます。

知事　有難う、有難う！　何卒お掛け下さい、皆さん。（新しい客座に着く。）

地方判事　ですが、まア私どもにもお話し下さいませんか、アントン・アントノヴィッチさん、一體如何して左樣いふ風に成つたんです？　詳しく事件の經過を話して下さいな。

知事　いや、其經過は眞個思ひ懸けないことでしてね、あの方が御自分で娘の手を乞ばうと思召したんですよ。

アンナ　眞個恭々しい優美な御樣子でね。眞似も出來ないやうな御樣子で、あの方が私に仰有つたんですよ。『アンナ・アンドレエヴナさん、私の爲たことは、貴方のお美しさを嘆賞する餘りに出たのですよ』つて……あんな好いお育ちの、高い敎養のある貴いお方は、私未だ一度も見たことが御座いませんよ。『私の言葉を信じて下さい、アンナ・アンドレエヴナさん』と、あの方が私に仰有つたのですよ、『私は最う此生命を一哥程にも重んじませぬ。そして、それは只貴方の稀れなお美しさに心を迷はされたためなんです……』

マリヤ　だつて、阿母さま、それはあの方が私に仰有つたことなんですよ。

アンナ　お默り、騷々しい！　お前の知つたことぢやアありませんよ……何時も餘計な口ばかり出すんだね、此人は！……で、あの方は斯う仰有つたんですよ、『アンナ・

アンドレエヴナさん、私は氣が狂ひ相です……』まァ斯んな嬉しがらせを仰有るんですよ。私は最う少しで斯う御返辭をするところでした、私達はそれ程大きな光榮を信ずることが出來ませんつてね――其時、あの方は突然跪づいて、優美な御樣子で仰有るんですよ。『アンナ・アンドレエヴナさん、私を總ての人間の中の最も不幸なものにして下さいますな！　お馴染甲斐に、何卒私の愛情を斥けないで下さい――でなければ、私は此場に死んで仕舞ひます！』

マリヤ　だつて、阿母さま、本當にそりやァあの方が私に仰有つたことなのよ。

アンナ　左樣さ、勿論……そりやァお前に仰有つたことだよ――私はそれを兎や角言つてやしないよ。

知事　で、あの方は何んなに私どもを心配させたでせうな！　何しろ彈丸で頭を射るなぞと仰有るんですからね。『私やァ彈丸で頭を射貫きます、彈丸で頭を射貫きます！』つて、あの人が言ふんですよ。

多くの人の聲　成程！　驚きましたね！

地方判事　何と云ふ性格の方でせう！

學校長　實際、そりやァ運命ですね、運命が左樣させたんですよ……

病院監督　運命なぞとは言はん方が可いですな、小父さん！　運命は七面鳥より以上のものぢやありませんからね……そりやァ如何しても平生の功蹟ですよ、それが今報いられたんです。（傍白。）何んな眞珠でも豚に投げられるつて云ふからね！

地方判事　一寸伺ひますがね、アントン・アントノヴィッチさん、貴方は本當に牝犬が欲しいんですか、此間お話のあつた？

知事　有難う。私は今牝犬のことなぞ頭にありませんから。

地方判事　ははァ、それがお氣に召さなかつたら、又他の奴を御相談しても好う御座いますがね。

カロープキンの妻　まァ、何んなに私は貴方の幸福を喜んで居るでせう、アンナ・アンド

レエヴナさん！　そりやア最う貴方の御想像以上ですよ。

カロープキン　處で、其の有名なお客人は今何處に被坐しやいますか。私は只今其方が何か用務を帶びて旅行されたやうに聞きましたが……

知事　左樣です、あの方は一日だけ旅行に出ました。非常に重大な用務がありましてね。

アンナ　あの方の伯父に當る方に祝福を乞ふためですよ。

知事　左樣だ、祝福を乞ふためです。だが、明日の朝……（嘖嘖をする。）

客事全部（それと同時に叫ぶ。）お目出度う！

知事　有難う、有難う！……ですが、明朝は確かに歸つて參りますよ……（再び嘖嘖をする。）

客（再び叫ぶ。）お目出度う！

病院監督　お目出度う、お目出度う、閣下！

ポプチンスキ　百年の御壽命と金銀の囊とを祈ります！

ドプチンスキ　いや、千萬年の後までもお繁へなさるで御座いませう！

病院監督（傍白。）いゝや、熱病にでも取附かれるんだ、惡黨奴！

カロープキンの妻（傍白。）惡魔にでも絞め殺されやアがれ！

知事　いや、誠に有難う！　私も貴方に同じ事を祈りますよ。

アンナ　私達はこれから都に住まうと思ひますよ。此土地には妙な空氣がありますよ……私達にやア餘り田舍過ぎますね……正直のところ、私は此土地が大嫌ひなんですよ……それに良人も……間もなく將軍に任ぜられるでせうからね……

知事　左樣、打明けて言ひますとね、諸君、私は非常に其の將軍に成らうと熱望して居る譯でしてな。

學校長　神は貴方の御希望を滿して下さりますよ。

ラスタコープスキ　神に懸けて、何んな事でも成功しますよ。

地方判事　大船は大洋に浮べねば成りませんからね。

病院監督　徳と功蹟とは結局常に報いられるものですよ。

地方判事　（傍白。）お前が將軍に成つたら、鷄に齒が生えらア！　お前なぞが將軍に成るのは、豚がカフスを著けるやうなものだ！　お前が勝利の女神を叫ぶなア未だ早からうぜ！　おい友達、お前が縱しやあの馬鹿を抱き込んだにせい、將軍に成るにやア未だ間があるよ。

病院監督　（傍白。）なに將軍だと！　惡魔にでも喰はれるが可いや！　だが、如何してあんな事を想ひ着いたんだらうな！　左樣だ、彼奴のやうに厚顏しく手を出しさへすりやア、そんな事に打突かるまいものでもない！　何しろ惡魔が來たつて引留められない男だからな！（知事に向く、聲高く。）願はくは、其節も何卒私どものことを忘れないで下さい・アントン・アントノヴィッチさん！

地方判事　で、何かゞ起つた場合にはですな——例へば、全然淸淨とは行かないやうな官職上の事件なぞですな、左樣いふものが起つた場合には、何卒味方に成つてお救ひ下さるやうに……

カローブキン　來年私は息子を都へ出して、母國に有用な人物にしようと思つてるんですがね。如何でせう、一つ貴方の御親切に依つて、憐れな孤兒を貴方の手許に置いて御監督下さる譯には行きますまいか……

知事　宜しい、お約束しませう、私が好く面倒を見て上げますよ。

アンナ　あゝ、貴方はそんな事をして居る暇がないでせう。それに——如何してそんな義務を引請けるんですね！

知事　だが、お前、それを履行することが出來さへしたら可いぢやアないか！

アンナ　出來る、勿論そりやア出來ませうよ。だが、私やア未だそんな下らない奴等を皆保護して遣る必要はなからうと思ふんですよ。

カローブキンの妻（二三の客に。）お聞きでしたか、私等を何と思つてるんでせうね？

二三人の客　えゝ、左樣、何時もあの女は左樣なんですよ。私やァ好くあの女を知つてますがね、あの女が食卓に就けば、屹度足を其上へ載つけますよ……

第八場

前場の人々。郵便局長が封を切つた手紙を手にして、呼吸を切らして駈け込んで來る。

郵便局長　まア惘れた話ぢやありまんか、皆さん！　檢察官だと思つた官吏は全く檢察官ぢやなかつたんですよ。

凡ての人　えゝ、檢察官ぢやないんですつて？

郵便局長　檢察官どころの騷ぎぢやありませんよ。私は此手紙から……

知事　何――何を君は言ふんだね！　何の手紙から……？

郵便局長　あの人か自分で書いた手紙から……或奴が手紙を出しに來たんですよ。一寸宛名を讀んで見ますと、『彼得斯堡、郵便街』とあるんですね。私やァ吃驚して仕舞ひましたよ。『あゝッ』と、私は考へましたね。『こりや屹度此處の郵便局の何か缺點を見附けて、私の上官に報告して遣るんだな。』『私は手紙を取つて破りました……

知事　如何して、君は……

郵便局長　私にも解らないんですよ、如何してそんな事をしたんだか――そりやァ確に人間以上の力に相違ありませんな、私を驅つて左樣させたのは。私やァすいでのことに飛脚を出して、其手紙を送らうとしたんですよ。處が、急に好奇心が非常な力で湧き上つて來ましてな――あれ程強い好奇心は、私も未だ嘗て經驗したことがありませんよ。『送るな、送るな！』と、其好奇心が私に喚び懸けるぢやァありませんか！實際非常な誘惑と非常な焦慮が私の心に起りました……一方の耳には、『決して破るな！　お前は不幸な身に成るぞ、鷄のやうに毛を引拔かれるぞ！』と云ふやうな聲が聞えるんですが、一方の耳には、何んな惡魔だが解らないけれども、『破れ、破れ、破

れ！』と、耳語くものがあるんですね。で、私が封臘に觸つた時は、赤熱した火が血管を流れて居るやうな氣がしたんですね……然も私が思ひ切つてそれを破つた時は、氷のやうにひやりとしましたよ……手はぶる〳〵慄へて、あらゆる物が眼の前で躍り出すんですね……

知事　君は何と云ふ失禮なことをするんだね、あんな、高貴な勢力のある方の手紙を破るなんて！

郵便局長　へ、へ、知事さん――それが可笑しいところですよ。彼奴は高貴な、方でもなければ勢力のある人物でもないんですからね！

知事　ぢや、一體何んな人間なんだい、君の考へぢや？

郵便局長　前に申した通り、彼れでもなけりやア此れでもない。彼奴が元來何んな人間だなぞと云ふことは、惡魔の外に何人も知つちやア居ませんよ……

知事（怒る。）なに、彼れでもなけりやア此れでもない！　君は如何してあの方のことをそんなに惡く言ふんだ？　彼れでもなけりやア此れでもない、惡魔の外には何人も知らないだつて!?　私は君を牢舍へ打ち込むよ。

郵便局長　誰が、貴方が？

知事　左樣だ、私がさ！

郵便局長　ふゝ――んだ！　貴方にそんな權利が有りますかい。

知事　御存知だらうが、あの方は私の娘と結婚して、私自身も高い顯官に成るんだよ……だから君を西伯利亞へ送る位は何でもないんだよ。

郵便局長　西伯利亞ですつて、アントン・アントノヴィッチさん！　西伯利亞は遠方ですね！　それよりも此手紙を讀みませう。其方が餘程手ッ取早いんですよ。皆さん、お許し下さいますか、私は此手紙を讀み上げようと思ふんですが？

總ての人々　さア、お讀みなさい、お讀みなさい！

郵便局長（讀む。）『我が親愛なるトラビチキン君、僕は此地で僕の一身に起つた不思

議な事件を急いで君に通知したいと思ふ。途中で僕は或歩兵大尉に型の如く財布を空にされた――而も非常に手際よく空にされたものだから、終には金子を拂はないために旅館の亭主がすんでのことに僕を牢舍へ入れようとした位だつた――處が、不意に町中の者が、僕の流行の衣服や彼得斯堡式の御面相のために、僕を旅行中の檢察官と間違へたちやアないか！　事件は既に非常に進捗して居るのだ。で、僕は今知事の家に宿を取つて居る。衆皆が寄つて簇つて、新に生れた赤ン坊でもあるやうに、僕の世話を見て呉れる。僕の方では母と娘に命懸けで戀をしかけて居る――たゞ僕は未だ全然思考が附かない……何方を失敬した方が可いかと迷つて居るんだよ。だが、僕の考へるに、阿母さんを先にした方が好ささうだ。と云ふのが、僕の見るところでは、其奴には素敵に氣がありさうだからね。で、君は未だ記憶えて居るかい、二人が質を置いて午飯を喰つた時のことを、又一膳飯屋の亭主が、金子を拂はずに肉入麵麭を喰つたと云ふので、僕の襟髪を捕まへた時のことを――あの時分は隨分難儀をしたね。だが、今度は木の葉が全くひつくら反つて居るんだよ。來る奴も、〳〵、光榮だと言つて、僕が欲しいと思ふだけ金子を借して呉れる。そりやア篦棒な變人どもだぜ――君が此處に居れば、半死に成る程笑ふだらうな……で、君は時々新聞に寄稿をするやうだね。或は君の利益に成らうかと思つて、僕は此處に一寸スケッチを書いて置かう。處で、先づあの知事は――驢馬のやうに馬鹿な奴だよ……』

知事　そんな事が有るもんか、そんな事が！　そんな事は其處に書いてない筈だよ。

郵便局長　（知事に手紙を見せながら。）さア御自分で讀んで御覽なさいよ。

知事　（讀む。）『驢馬のやうに馬鹿な……』そんな事があるもんか！　そりやア君が自分で書いたんだ！

郵便局長　如何して、私にそんな事が書けるんですかい！

病院監督　お讀みなさいよ。

學校長　最つと先をお讀みなさいよ。

郵便局長（讀み續ける。）『知事は――驢馬のやうに馬鹿な奴だよ……』

知事　そんな手紙は惡魔にでも喰はせろ！　二度讀む必要が何處にあるか！　一體、誰が其句を繰り返せと君に言つたんだ！

郵便局長（讀み續ける。）うむ……うむ……うむ……それで……『馬鹿な奴だよ。郵便局長も同じく妙な奴だ……』（默る。）うむ、何うも俺の批評は當つて居ないな……。

ドブチンスキ　構ひませんよ、何卒讀んで下さいな！

郵便局長　うむ、一體何のために讀むんですよ？

知事　何を言つてるんだ、讀み懸けたら讀んで仕舞ふが可いぢやないか！　悉皆お讀みなさいよ。

病院監督（手紙を取つて。）御免なさい、私が剩餘を讀みますから。（眼鏡を懸けて讀む。）『郵便局長は僕等の局の小使ミケエフに瓜二つだよ。僕には其奴も宛然火酒飲みの泥棒のやうに見える……

郵便局長（觀客に向つて。）うむ、あの青二才奴、殴り据ゑても飽き足らない！……最うそれだけか。

病院監督（更に讀む。）『病院――監――督……』うむ……うむ……うむ……（默る。）

カローブキン　如何して貴方は默つて仕舞ふんですね？

病院監督　字が……少し讀み難いので……だが、好くない事が書いてあると云ふだけは解りますよ。

カローブキン　ちやア私に手紙をお貸しなさい。私は貴方よりも幾許か眼が好いやうに思つてるんですよ。（手紙を取らうとする。）

病院監督（手紙を碇かり持つて。）いや、離して下さい……此句だけ脱かしても可いでせう……其次は好く解りますよ。

カローブキン　いや、御免なさい……私にや其處ン所も屹度解りますよ。

病院監督　私にだつて讀めますよ――一寸先なら好く解るやうに書いてありますから

ね。

郵便局長　いや、悉皆讀んで下さい！　其前だつて悉皆讀んで仕舞つたぢやァありませんか。

客一同　カロープキンさんにお渡しなさいよ……カロープキンさん、其先を讀んで下さいな！

病院監督　まァ仕方がないや！（手紙を渡す。）御免なさいよ……此處……（指を其行の上に置いて。）此處から始まるんですよ。（客一同彼に近づく。）

郵便局長　お讀みなさい、お讀みなさい！　何を遠慮するんです！　貴方は皆お讀みなさいよ！

カロープキン（讀む。）病院監督ジエミリヤニカは頭に帽子を被つた豚だ！……

病院監督（觀客に向つて。）此奴は意味が深いなァ！　一體如何云ふ譯なんだらう、頭に帽子を被つた豚つてえのは！　帽子を被つた豚を見た人があるかな！

カロープキン（其の先を讀む。）『學校長はペストのやうな蒜の香氣を振り撒く……』

學校長（觀客に。）あゝ神樣、私は生涯決して蒜を口にしたことなぞありませんよ。

地方判事（傍白。）あゝ有難い、彼奴は俺のことを忘れたんだぜ！

カロープキン（其先を讀む。）『地方判事は……』

地方判事（傍白）え、今度は俺の番か！（高い聲。）諸君、手紙は何うも餘り長過ぎるやうですね。愚見に據れば、斯んな詰らぬ事を聞いて居るのは最う大分倦きて來たやうに思ひますよ……

學校長　私は左樣思ひませんな。

郵便局長　え、何が倦きたんです。構はず讀んで下さいよ。

病院監督　それ處か、大いに先を待つて……

カロープキン（續ける。）『地方判事リヤプキン・チヤプキンは極端な mauvais ton（註曰、惡風俗、だらしのないこと。）だ。』（默る。）これは佛蘭西語でせうな……

地方判事　これが如何いふ意味だか知つた者は惡魔の外にないよ。人殺しとか泥棒とか云ふ意味だつたら、衆皆嬉しがるだらうな。だが、恐らくそれよりも最つと惡い意味かも知れないよ！

カロープキン　（其の先を讀む。）『つまり凡ての人間が非常に丁寧で、客に親切なんだよ。御機嫌よう、我が親愛なるトラビチキン君。僕は君の例に倣つて同じやうに文學を遣らうかとも思つて居る。そんな事でもしなければ、人生は餘りに退屈だからね。精神も亦多少の食物を要求する。人間は折々天上界に高翔して見る必要があると、僕は思ふね。サラトフ縣ボドカリトヴカ村へ宛てゝ返事を呉れ給へ。』（手紙を裏返して宛名を讀む。）『イワン・ワシリエヴィッチ・トラビチキン君、彼得斯堡、郵便街十七番館、三階右側。』

婦人の一人　まア思ひ懸けない嘲笑詩でしたわね！

知事　あゝ、彼奴は俺の息の根を止めやアがつた！……息の根を止めやアがつた！

俺は踏み殺された、踏み殺された、踏み殺された！　俺にや最う何にも見えない——見えるものは、顔ぢやアなくつて豚の鼻ばかりだ。其外には何にも見えない！（彼奴を攫まへろ、攫まへろ、攫まへろ！（其の手眞似をする。）

郵便局長　如何して彼奴を攫まへることが出來ませう！　私やア主事に命じて、一番好い馬を出して遣つたんですよ！　私やア屹度惡魔にでも取憑かれて居たんですね！

カロープキンの妻　まア衆皆酷い周章方をしたもんですね。昔から例がないでせう！

地方判事　そればかりぢやアない、諸君——實際私は馬鹿ですね！——彼奴は私から三百留布奪つて行つたんですよ。

病院監督　彼奴は又四百留布だけ私の財布を輕くしましたよ。

郵便局長　私も、あゝ口惜しいな、矢張三百留布だけ！。

ポプチンスキ　左樣、私とドブチンスキからも六十五留布借り倒して……

地方判事（惘れ返つたやうな容子で、手を組合せながら。）だが、諸君、一體如何して

斯んな事に成つたんでせうね――私どもが揃ひも揃つて鼻毛を讀まれるなんて！

知事（我と我が頭を打ちながら。）それで俺では、……俺は老耄の馬鹿ぢや！　老耄の阿呆と云ふのは、私ぢや――年の所爲で心が愚に反つたんだね！……三十の時に俺は最う役に就いて居た。商賈にも、請負人にも、一人として瞞されたことはなかつた！……幾度となく泥棒や詐欺を出し抜いて遣つた！　全國を瞞して廻るやうな狡猾い無賴漢や浮浪人どもを係蹄に懸けて遣つたことも一度や二度でない！……三人の總督、ねえ、三人の總督だよ――そんな連中でも俺やア手玉に取つて遣つた――而も見事にだよ。（意味ありげな手眞似をする。）……で、一人でも總督を手玉に取るなア、却々これで難かしいものだよ！……

アンナ　だつて、お前さん、そんな事はなからうと思ひますね……あの人は實際マリちやんと許嫁に成つたんですよ。

知事（荒々しく。）許嫁だ！　ぢやア、お前は未だ彼奴が俺達を馬鹿にしたり、瞞したりしたのが解らないのか！　糞でも喰やアがれ、あんな許嫁なんぞ！……（絶望的に。）俺を見ろ、俺を――衆皆集つて俺を見ろ……全世界から、全基督教國から集つて來て、知事が瞞された醜態を見て遣れ！　馬鹿だと言へ、老耄の馬鹿だと言つて遣れ！（手で自分の頭を毆る。）あゝ、俺は鈍物ぢや、牛乳のやうに白い髯をして居ながら、あんな青二才を非常な高官と間違へるなんて！　然も彼奴は今郵便馬車の鈴を鳴らしながら、嬉しがつて國道を彼方へ駈けて行きやアがる！　彼奴は國中に此話を觸れるだらう！　俺は到る處で笑はれ、嘲られ、惡い洒落の標的にされるんだ！……だが、それよりよ最つと惡いのは、何處かのヘボ文士、のらくら者の文士どもが新聞や雜誌に俺のことを載せやアがることだ！　あゝ、忌々しいな！……彼奴等は俺の位階も公の地位も何とも思やアしまい！　左樣だ、そして、衆皆が俺に齒を見せて、面白がつて手を叩きやアがるだらう！……何を貴樣達は笑ふんだ？　自分のことを笑ふが可いや！……うむ、貴樣達はな！……（荒々しく足踏みをする。）あゝ、俺が其奴等を

捕まへることが出來たら！　おゝ、あの呪はれた文士ども、忌々しい自由主義者、惡魔の子！――俺はお前達を悉皆袋に入れて、一緒に突き碎いて呉れるぞ――血族といふ血族を一時に地獄へ遣つて呉れるぞ！……（兩の拳骨を振り廻して、荒々しく足踏みをする。一寸沈默してから。）俺ア全然自分を制することが出來ない。神樣が或男を罰しようとお思ひに成ると、先づ其男を盲目になさると云ふが、眞實だな！　あの道化野郎に、何處に檢察官に見へるようなところが有つたか。何にもない、何にもある筈がない！　だのに、突然國中の奴が咽喉が裂ける程叫び出しやアがつた、『檢察官だ、檢察官だ！』と。誰だい、眞先に彼奴を檢察官だなぞと思ひ違へたのは？　さア返辭をしろい！

病院監督　（手を伸ばしながら。）そりやア首を絞められつたつて返辭は出來ませんよ。何が何やら全然解らなかつたのですからね！　何と云ふ霧が私どもの上に落ちて居たんでせうな――惡魔が私どもを愚弄したのに相違ありませんよ。

地方判事　誰が眞先にそれを言つたんですつて？……えゝ、そりやア其處に居る、あの若造が言つたんですよ！（ポプチンスキとドプチンスキを指す。）

ポプチンスキ　あゝ、神樣、私やア思ひも懸けませんでしたよ……

ドプチンスキ　私は何にも知らなかつたんですよ、全然何にも……

病院監督　成程、君等だつたね！

學校長　眞個、君等でしたね！　君等が狂人のやうに宿屋から駈けて來て、『あの方は彼處に居ますよ、彼處に居りますよ！　あの方は一切懸賣で取つて居ますよ』つて叫んだんだよ……美しい小鳥を君方は彼處で見附けて呉れたんだね！

知事　勿論、そりやア君等だつた！　君等は呪ふべきお饒舌家だよ、忌々しい嘘吐きだよ。

警察署長　君等は君等の檢察官やお伽話と一緒に惡魔にでも喰はれちまふが可いや！

知事　呪はれた羊の頭ども奴、君等のすること云へば、終日町中をうろつき廻つて

衆皆を迷惑がらせたり、嘘を撒き散らしたりする外に、何にもないんだよ——尻尾の千斷れた鵲と云ふのは君等のこつたよ。

地方判事　忌々しい周章者奴！

學校長　使ひ古しの寢臺帽子奴！

病院監督　腰拔けの驢馬奴！（一同二人の周圍に迫る。）

ポプチンスキ　神に懸けて、私ぢやアありませんよ——そりやアドブチンスキ君でしたよ。此男が……

ドブチンスキ　神樣、お助け下さい——ポプチンスキ君、君が始まりだつたよ、何したのは……

ポプチンスキ　僕は夢にも思はなかつた！　君が始まりだつたよ、何したのは……

第九場

前場の人々。憲兵一人。

憲兵　勅命に依つて遣はされた檢察官が御到着に成りました。即刻罷り出るやうに仰せられましたぞ。其のお方は目下旅館にお待ちで御座います。（此言葉は雷鳴のやうに一同の上に落ち、婦人は皆一時に驚愕の叫びを立てる。一同不意に飛び上つて、次には化石したやうに立ち停まる。）

無言舞臺

中央に知事、石像の如く動かず、腕を前に伸ばしながら、首を背後に反せる。其の右には、彼の妻と娘、一度全身を動かして、知事の方へ向く。其の背後には郵便局長、疑問點を畫いて移動し、觀客の方へ向く。局長の背後に學校長、非常な驚愕に陷つたる體、校長の背後、舞臺の一方に三人の婦人、一緒に集まつて、非常に諷刺的な表情をして知事の家族を眺める。知事の左手に病院監督、少しく首を傾げて、恰も何

事をか聽くが如き態度をつゞく。其の傍らに地方判事、腕を突き出しながら蹲踞るが如き形にて、恰も口笛を吹き、又は『おい、小母さん、今日は聖ジョージ祭だぜ！』と言はむとするが如くに、唇を動かす。其の背後にカロープキン、觀客に向つて眼眴せをしながら、惡意ある表情にて知事の方を指示す。舞臺の一方にボブチンスキとドブチンスキ、相向ひて腕を突出し、口を開き、眼を剝いて互に睨め合ふ。其他の客は彫像の如く動かずに居る。此の化石せる群の總ては殆んど半分間其位地を保つ。

——をはり——

登場人物

アントーン・アントノーヴィッチ・スクワズニック＝ヅムハノフスキ、X町の知事。
アンナ・アンドレーエヴナ、知事の妻。
マリヤ・アントーノヴナ、知事の娘。
ルカー・ルキーチ・フロポフ、學校長。
ナーヌチェニカ、學校長の妻。
アムモス・フョードロヴィッチ・リャプキン＝チャプキン、地方判事。
アルチェーミ・フィリーポヴィッチ・ジェミリオニーカ、病院監督。
イワーン・クージミッチ・シュペーキン、郵便局長。
ピョートル・イワーノヴィッチ・ドーブチンスキ、
ピョートル・イワーノヴィッチ・ポーブチンスキ、　地主
イワーン・アレキサンドロヴィッチ・フレスタコフ、彼得斯堡から來た役人。
オーシップ、前者の下僕。
ヨハン・クリスチャン・ヒュップネル、地方醫。
フョードル・アンドレーエヴィッチ・リュリュコフ、
イワーン・ラザレーヴィッチ・ラスタコーフスキ、　此町の退職官吏、名譽職。
ステパーン・イワーノヴィッチ・カロープキン、
ステパーン・イーリーチ・ウファヴォルトフ、警察署長。

檢察官

スヴィスツーノフ、
ブーゴヴィチン、
デルジモールダ、　巡査。
アブゾーリン、商人。
ブェブローニヤ・パトローヴナ・パシュローブキナ、錠前屋の妻。
下士官の寡婦。
ミーシュカ、知事邸の召使。
給仕。
商人、客、請願人ども大勢。
時は千八百四十年の頃、場所は州の首府たる田舍町。

備考　本表には木文中わざと揚音符を省きて發音せしものも、それを添へて發音を示せり。例へばアントンをアントーンと書き表せるが如し。但しフレスタコフとあるは、此方が正しき露西亞の發音にて、クレスタコフは間違ひ也。

大正六年六月二十五日印刷
大正六年六月二十八日發行

死せる魂　下卷
【非賣品】
（個製本）

編輯兼發行者　國民文庫刊行會　東京市神田區小川町一番地
右代表者　鶴田久作　東京市本郷區西片町十番地
印刷者　中島藤太郎　東京市神田區錦町三丁目一番地
印刷所　神田印刷所　東京市神田區錦町三丁目一番地

著作權所有

發行所　電話本局圓七三二番　振替東京一八五七二番　國民文庫刊行會